

## チベット訳『宝篋經』一和訳と訳注(2)

五 島 清 隆

### 〔抄 録〕

第2巻では、シャーリプトラとマンジュシュリー（文殊）の関係が、シャーリプトラの回想という形で明らかにされていく。テーマは文殊の偉大さ、とりわけその神通・神変の卓越さである。文殊の仏国土巡りに同道したシャーリプトラは、自分と文殊とが同等の神通力を持っていると思い、それを察知した文殊は、神通力競べを提案し実行する。負けを認めたシャーリプトラは、文殊とは普通の鳥とガルダとの比較では喩えられないほどの大きな懸隔があると告白する。次に、アーナンダによるシュラーヴァスティー大城での文殊の悪魔調伏のエピソードが報告される。文殊の神通力称讃は、次の第3巻以降、引き続きアーナンダ、更にマハー・カーシャパ、プールナ・マイトラヤニープトラと続いて行く。このような偉大な神通・神変は、文殊という菩薩像に見られる特性の一つだが、文殊には他にも様々な特性が付与されている。第3節では、他經典に見られる文殊像と比較しながら、その意味を考察する。

**キーワード** 文殊師利 神変 加持 悪魔 心性本淨

### 1 はじめに

先の第1巻では、スプーティとマンジュシュリー（文殊）との問答の中で、菩薩の資質（仏法の器）や、菩薩の特性（無畏・不得果）、知の内容（空・不二）などが明らかにされ、仏陀の教説としては、菩薩の功德の称讃と法界清浄の教理が述べられていた。特に、菩薩の称讃では広くインド仏教文化圏に見られる神話や伝承に根ざした比喩が用いられ、これらは他の大乗經典にも類似のものが見られることから、比喩表現を介して他經典との関係を探る試みを、とりわけ『法華経』『薬草喩品』を中心に、おこなった。

今回訳出する第2巻では、第1巻末尾で仏陀の問いに答えられなかったスプーティの沈黙を契機に、声聞と菩薩の法界観の相違が明らかにされる。文殊の攻撃的な問いに追い詰められたスプーティは、智慧第一のシャーリプトラに助けを求めるが、文殊の卓越さ、とりわけその

神通・神変の超越性は、声聞の境界を絶していることを自らの過去の経験として示していく。次いで、アーナンダ、マハー・カーシャパ、プールナ・マイトラーヤニープトラも、それぞれ、自らの経験を披瀝し、文殊の偉大な神通・神変を称讃することになる。アーナンダが登場して、2つのエピソードの中の1つを語ったところで第2巻は終わり、第3巻に繋がっていく。ここに見られる代表的な仏弟子たちと文殊との関係は、『維摩経』における十大弟子・菩薩たちと維摩との関係を彷彿とさせるが、本経では、鋭い舌鋒もさることながら、文殊の神通・神変の偉大さが主要なテーマとなる。

以下、第2巻の和訳と訳注を提示し、最後に、本経に見られる文殊の人物像、とりわけその神通・神変の意味について考察することとする。

## 2 和訳と訳注

第2巻 (bam po gnyis pa)<sup>(1)</sup>

### V スプーティの沈黙と法界との関係

その時、法王子たるマンジュシュリー (以下、M) は、黙したままの具寿 (\*āyusmat) スプーティ (以下、S)<sup>(2)</sup>に次のように言った。「大徳 (\*bhadanta) S よ、あなたはなぜ、世尊に<sup>(3)</sup>お声をかけられた<sup>(4)</sup>のに、返事もしないままにいる [H 403b] のですか」 [P 285a]

Sが言う。「Mよ、私は、以前、無上正等覺 (\*anuttarasamyaksambodhi この上なく正しく完全な悟り) には入っていませんでしたが、今もそうなのです。なぜなら、[私は、以前、尽きることがなく何の妨げもない叡智 (\*pratisaṃvid) を修習していなかったからです。]<sup>(4)</sup>声聞たちの弁才 (\*pratibhāna ひらめきに基づく説法) は障碍があり<sup>(5)</sup>限界があり<sup>(6)</sup>ですが、菩薩の弁才は障碍もなく限界もないのです」

Mが言う。「大徳Sよ、法界 (\*dharmadhātu) においておよそ障碍や限界などを〔認識対象として〕見る<sup>(7)</sup>ことがあるでしょうか」

[Sが] 言う。「Mよ、そのようなことはありません。法界 (\*dharmadhātu) において障碍や限界を見ることはありません」

[Mが] 言う。「<sup>(8)</sup>ではなぜ [あなたは]、大徳Sよ、[弁才を] 中断 (\*cheda) することで [それを] 制限したのでしょうか<sup>(8)</sup>」

[Sが] 言う。「<sup>(12)</sup>Mよ、完全に断ち切る (\*pariccheda) というあり方によって法界を証知した (\*parijñāta) 人たちは、<sup>(9)</sup>限界のある断滅ですが<sup>(9)</sup>、無量<sup>(10)</sup>というあり方で法界を証知した人たちは、<sup>(11)</sup>断滅したものを断滅することはしません<sup>(11)→(12)</sup>」

[Mが] 言う。「大徳Sよ、法界において完全に断ち切る (\*pariccheda) ということがあるでしょうか」

[Sが] 言う。「Mよ、そのようなことはありません。法界はあらゆるものの門であり、法

界において完全に断ち切る人など誰もおりません」

〔Mが〕言う。「ではなぜ〔Zh 680〕〔あなたは〕、具寿Sよ、法界について〔H 404a〕完全な断滅を説くのでしょうか」

〔Sが〕言う。「<sup>(15→</sup>Mよ、<sup>(13→</sup>声聞の領域 (\*viṣaya 境界) を基準 (\*pramāṇa) にすれば<sup>←13)</sup>、法界を完全に断ち切ったものとして説きます。仏陀の領域を基準にすれば、その人は、法界を<sup>(14→</sup>無限のものとして<sup>←14)</sup>説きます<sup>←15)</sup>」

Mが言う。「<sup>(16→</sup>大徳Sよ、法界は、領域 (\*viṣaya) 〔というものがあって、そこ〕から生じるのでしょうか<sup>←16)</sup>」

Sが言う。「Mよ、法界が領域から生じることはありません。Mよ、なぜなら、法界には領域はなく、領域とは無縁だからです」

Mが言う。「ではなぜ〔あなたは〕、具寿Sよ、〔法界を〕種々の領域として説くのですか」

Sが言う。「Mよ、『声聞たちの弁才は障碍があり限界がありますが、〔P 285b〕菩薩の弁才は障碍もなく限界もないのです』と最初に私は言わなかったのでしょうか」

Mが言う。「大徳Sよ、あなたは叡智 (\*pratiṣamvid 尽きることがなく何の妨げもない理解・表現能力) を得ていないのですか」

Sが言う。「Mよ、わたしは〔その〕叡智を得ています」

Mが言う。「<sup>(17→</sup>ではなぜ、具寿Sよ、〔弁才の〕中断という制限があるのでしょうか<sup>←17)</sup>」

Sが言う。「Mよ、声聞たちの叡智は〔H 404b〕、優劣〔のちがひ〕がある衆生たちの機根を知ることとは無縁だからです。それゆえ、〔弁才の〕中断という制限があるのです。菩薩たちの叡智は、優劣〔のちがひ〕があるすべての衆生たちの機根を知ることによって生じるものです。それゆえ、〔弁才の〕中断という制限はありません」

Mが言う。「具寿Sの叡智という知を生じた〔Zh 681〕知の領域 (\*jñānadhātu)<sup>(18)</sup>には、限界があるという特質 (\*lakṣaṇa) があるのですか」

Sが言う。「Mよ、そのようなことはありません。知の領域には障碍がないという特質があり、限界がないという性質 (\*prakṛti) があります」

Mが言う。「具寿Sよ、もし知の領域には障碍がないという特質があり、限界がないという性質があるのであれば、ではなぜ〔弁才の〕中断という制限があるのですか」

#### VI-1 シャーリプトラの回想(1) プラジュニャープラディーパとマンジュシュリーの咳払い

Sが言う。「Mよ、<sup>(19→</sup>この具寿シャーリプトラは、『声聞たちの中で偉大な智慧ある者の中で最高だ』と世尊が仰っておられる<sup>←19)</sup>のですから、彼に質問してください。彼こそがあなたに答えてくれるでしょう」

具寿シャーリプトラが言う。「具寿Sこそ、語ってください。私は、M法王子による説法を聞きたいのであって、<sup>(20→</sup>〔聴聞を〕中断したくはないのです。<sup>←20)</sup>なぜなら、〔H 405a〕このM

法王子は、以前、何十万もの多くの仏陀たちの前で、法を語り、偉大な声聞たちを沈黙させた [P 286a] のを、私は目撃しました。[〔ですから〕 どうしてその M の前で私が今語ることができましょうか。]<sup>(21)</sup>

さて、具寿 S よ、東の方、何十万もの多くの仏国土を過ぎたところに、『浄信のある<sup>(22)</sup>』という世界があります。そこには、『プラバーケートゥ (\*Prabhāketu 光明を旗印とする者)<sup>(23)</sup>』という名の、正しく完全に覚った尊敬に値する如来が現在おられ、お暮らしになり、時をすごされ、人々に教えを説いておられます。そこに、『プラジュニャープラディーパ (\*Prajñāpradīpa 智慧を灯火とする者)<sup>(24)</sup>』という名の偉大な声聞がおり、〔彼は〕世尊によって、『声聞たちの中で智慧が最高の者』と言われています。正しく完全に覚った尊敬に値する如来である、[Zh 682] かのプラバーケートゥ世尊が宴坐 (\*pratisamplāyana 独居して行う心安らかな瞑想)<sup>(25)</sup> なさっている時、かの偉大な声聞であるプラジュニャープラディーパは、ブラフマー神 (梵天) の世界<sup>(26)</sup> にまで行って、<sup>(27→)</sup> 三千大千世界を余すことなくすべて満足させて法を説いていました<sup>←27)</sup>。私と M 法王子も、その世界に行き、別に、何十万もの多くの菩薩たちと十万の天子たちが、法を [H 405b] 聴聞しようとして、M 法王子の後を追ってきていました。さて、M 法王子は、『極光浄 (\*Ābhāsvara)<sup>(28)</sup>』という神々の住所 (\*devanikāya) に居て、〔そこで〕 三千大千世界すべてに轟き、魔の住居すべてを破壊するような、<sup>(29→)</sup> 咳払いの音<sup>←29)</sup> を出しました。その時、かの偉大な声聞は、その<sup>(30→)</sup> 咳払いの音<sup>←30)</sup> を聞くと、その咳払いの音の力強さに耐えられなくなって、<sup>(32→)</sup> ヴァイランバの風 (\*vairambha-vāyu)<sup>(31)</sup> に吹き飛ばされた鳥のように<sup>←32)</sup>、地上に落ちてしまいました。

彼は、<sup>(33→)</sup> 恐怖のあまり毛が逆立ち (\*bhayaromaharṣa)、奇異な気持ちにとらわれました<sup>←33)</sup>。正しく完全に覚った尊敬に値する如来である、かのプラバーケートゥ世尊のところにやって来ました。やって来ると、世尊の両足に頭を付けて礼拝し (\*bhagavataḥ pādau śirasā vanditvā)、[P 286b] 次のように申し上げました。『世尊よ、私は、耳にした咳払いの音のその力強さに耐えられなくなって、ヴァイランバの風<sup>(34)</sup> に吹き飛ばされた鳥のように、地上に落ちてしまいましたが、このような深い (\*gambhīra) 咳払いの音はいったい誰が出したものでしょうか』

世尊は次のように仰せになられました。『比丘よ、[Zh 683] かの M 法王子という名の一生補処の不退転の菩薩が、私に会い、挨拶をし、奉仕し、質問し、〔さらに〕 良く質問をしようとして、無礙の神通力 (\*asaṅga-ṛddhibala) によって自由に移動 (\*vikriḍita 遊戲) して、この世界にやって来た。かの M 法王子は極光浄という神々の住所に居て、〔そこで〕 三千大千世界すべてに轟き、魔の住居すべてを破壊するような咳払いの音を出したのである』

彼 (プラジュニャープラディーパ) が〔世尊に〕 申し上げる。『世尊よ、彼のような正しい人 (\*satpuruṣa) たちに会えるのであれば幸せなことですから、かの M 法王子に私たちも会えますように』

その時、正しく完全に覚った尊敬に値する如来であるプラバーケートゥ世尊は、M 法王子に、やって来るようにと、合図をなされました<sup>(35)</sup>。さて、M 法王子は、菩薩たちや天子たち<sup>(36)</sup>と共に、その虚空 (\*antarikṣa)<sup>(37)</sup>から降りてきて、正しく完全に覚った尊敬に値する如来であるプラバーケートゥ世尊 [H 406b] のところにやって来ました。やって来ると、世尊の両足に頭を付けて礼拝し、世尊の周りを三度右回りに回って (\*bhagavantam triṅṅvāḥ pradakṣiṇikṛtya)、一方の隅において (\*ekānte)、それぞれに相応しい誓願と神通力とによって化作した座<sup>(38)</sup>に坐りました。<sup>(39)</sup>その時、正しく完全に覚った尊敬に値する [P 287a] 如来であるプラバーケートゥ世尊は、M 法王子に [Zh 684] 次のように仰せになりました。<sup>(39)</sup>

『M よ、汝は、<sup>(40)</sup>どのような意義を見て<sup>(40)</sup>、「浄信のある」〔という〕この世界に來たのか』

<sup>(41)</sup>M が申し上げる。<sup>(41)</sup>『世尊に会い、挨拶をし、奉仕し、質問し、〔さらに〕良く質問をしようとしてです』

## VI-2 シャーリプトラの回想(2) 如来に会い、問うことの意味

かの世尊が仰せになられる。『M よ、(1) どのようにしたら如来に会うことが清浄 (\*viśuddha) になるのだろうか。(2) どのようにしたら如来に挨拶することになるのだろうか。(3) どのようにしたら奉仕することになるのだろうか。(4) どのようにしたら質問することになるのだろうか。(5) どのようにしたら〔さらに〕良く質問することになるのだろうか』

M が申し上げる。『(1) 世尊よ、法を見ることが極めて清浄な場合、如来を見る (会う) ことは清浄であります。(2) 世尊よ、[H 407a] <sup>(42)</sup>身も心も尊敬することなく、敬服することなく、〔およそ〕するということがなく、畏怖することのない状態にあり、不動の状態を獲得し、心〔の動き〕とは無縁の戒を行じ、念を持して理解するままに行動する、そのような場合<sup>(42)</sup>、如来に挨拶することになるでしょう。(3) 世尊よ、自や他を〔真実には存在していないのにそれを存在するものとして〕提示 (\*samāropa 増益) することなく、〔仏・法・僧を見ることなく〕<sup>(43)</sup>平等を平等とせず、不平等を不平等とせず、なすことなく、行為することなく、諸仏世尊とその行動を同じくし、仏身 (\*buddhakāya) と法身 (\*dharmakāya) とに随従し、自身の身体<sup>(44)</sup>も法界に随入していると見、<sup>(45)</sup>見る時には、見ても見ることなく、間違っで見ることなく<sup>(45)</sup>、[Zh 685] どんなものにも遠ざかることなく近づくこともない、そのような場合、如来に奉仕することになるでしょう。(4) 世尊よ、[P 287b] 正しくない (\*ayoniśas) ということはないというあり方で正しく問い、正しくないことは何も見ず、自身の正しさゆえにすべての法の正しさに従い、散乱した心ではなく [H 407b] 精神集中した (\*samāhita) 状態で問い、<sup>(46)</sup>問う人、問う目的 (理由)、問う相手 (内容)〔の三要素〕を三世にわたって探究し、〔この〕三〔要素からなる〕輪が清浄であること (\*trimaṇḍalapariśuddhi) によって問う<sup>(46)</sup>、そのような場合、如来に質問することになるでしょう。(5) 世尊よ、<sup>(47)</sup>問いがある時に〔新たに何かを〕理解するということはなく<sup>(47)</sup>、<sup>(48)</sup>〔如来の〕お言葉に随順し、

如来が〔満足して〕お喜びになるようにし<sup>48)</sup>、集会にいる人たちをすべて喜ばせ、問いに執着することなく、その問いによって無量の衆生が悟りに向けての〔誓願の〕鎧を身に着け、その鎧を悟りの座(\*bodhimaṇḍala)に至るまで脱ぎ捨てることがない、そのような場合、如来に良く質問することになるでしょう。

その時、正しく完全に覚った尊敬に値する如来である、そのプラバーケートゥ世尊は M 法王子に「よろしい」〔との称讃の言葉〕を与えられた(\*sādhukāram adāt)。『M よ、如来にはそのように会うべきであり、そのように挨拶するべきであり、そのように奉仕するべきであり、そのように質問するべきであり、そのように良く質問するべきだ、というその言葉を汝が語ったことは、よいことである、素晴らしいことである』

さて、M 法王子は、偉大な声聞であるプラジュニャープラディーパ(以下、P)に次のように言った。[Zh 686] [H 408a] 『具寿は、如来にどのように会い、どのように挨拶し、どのように奉仕し、どのように質問し、どのように良く質問するのですか』

彼(P)が言う。『M よ、このような教説は、私たちのような<sup>49)</sup>他の声にしたがって信解(\*adhimukti)する<sup>49)</sup>声聞には〔答えられる〕領域ではありません』

〔M が〕言う。『では、何を直証(\*abhisamaya)して具寿 P の [P 288a] 心は解脱したのですか』

〔P が〕言う。『M よ、真実(\*satya)を直証することによって私の心は解脱しました』

〔M が〕言う。『具寿よ、真実なるものをどう説き示しますか』

彼(P)が言う。『M よ、<sup>50)</sup>対応するもの(\*pratipakṣa)がないものとして顯示される(\*prabhāvitā)<sup>50)</sup>のが真実です』

〔M が〕言う。『では、どのように真実を直証して具寿の心は解脱したのですか』

〔P が〕言う。『M よ、世俗(\*saṃvṛti)に依拠してそのように説き示しますが、勝義(\*paramārtha 究極的な真実)としてではありません』

〔M が〕言う。『世俗は勝義と結びついているのですか』

〔P が〕言う。『もし、〔両者が〕結びついていないとすると、勝義はなくなってしまいます』

〔M が〕言う。『では、どうして、「世俗に依拠して説くのであって勝義としてではない」〔と言える〕のですか。もし、世俗が勝義と結びついているのであれば、つまり、勝義の真実がたった一つの真実ということにならないでしょうか』

〔P が〕言う。『M よ、もしこの言葉を聞けば、初学の(\*ādikarmika) [H 408b] 菩薩たちは恐れることでしょう』

〔M が〕言う。『大徳さえ恐れるのですから、初学の菩薩たち〔が恐れること〕は言うまでもありません』

〔P が〕言う。『M よ、私を恐れさせることは出来ません』



〔Mが〕言う。『具寿よ、恐れることなく厭うことなくして、執着 (\*upādāna) が無くなり、煩惱 (\*āsrava 漏) から心が解脱することがあるでしょうか』

〔Pが〕言う。『M よ、声聞たちは、恐れることがなく、厭うことがなければ、[Zh 687] 解脱しません』

〔Mが〕言う。『具寿よ、それ故、先ほどは、その恐れのことを考えて、「大徳さえ恐れるのですから、初学の菩薩たち〔が恐れること〕は言うまでもありません」と、そのように言ったのです』

〔Pが〕言う。『M よ、菩薩は、どのようにして解脱するのですか』

〔Mが〕言う。『大徳よ、菩薩は恐れることなく厭うことなくして解脱します』

〔Pが〕言う。『M よ、何を考えて、そのように言うのですか』

〔Mが〕言う。『何百コーティもの魔の軍隊を恐れず、人々に法を説くことを厭わず、〔同時に〕無量の福德資糧を積むことを恐れず、無量の [P 288b] 智慧資糧を積むことを厭わない〔ということを考えて、です〕』

その時、その集会の中にいた天子たちは、種々の華を M 法王子の上に散じました。〔そして〕『<sup>(51)</sup>M 法王子が [H 409a] 現れるところでは、如来を目の当たりに見ます。M 法王子がいる場所は、ストゥーパとなります。M 法王子が法を説くのを理解する、あるいは、理解するであろう人々は、すべての福德を保持しているのです<sup>(51)</sup>』という言葉述べました。

さて、M 法王子は、偉大な声聞である P に向かって次のように言いました。『具寿は、声聞たちの中で智慧が最高だと世尊に言われているのですが、その智慧は有為の特質のあるものですか。それとも、無為の特質のあるものですか。もし、有為の特質があるのであれば、生じつつあるものは滅を孕んでいることになります。もし、無為の特質があるのであれば、[Zh 688] <sup>(52)</sup>〔生じ・つつあるもの (住) が・滅するという有為の〕三相から離れてしまうことになります<sup>(52)</sup>』

〔Pが〕言う。『M よ、「<sup>(53)</sup>聖人たちは無為によって顕示される」と〔私は〕説きます<sup>(53)</sup>』

〔Mが〕言う。『大徳よ、無為は〔こういうものだ〕言葉で示す (\*prajñāpayati) ことができますか』

〔Pが〕言う。『M よ、そのようなことはありません。<sup>(54)</sup>無為を言葉で示すことなどありえません<sup>(54)</sup>』

〔Mが〕言う。『では、どうして「聖人たちは無為によって顕示されると [H 409b] 説く」とそのように言ったのですか』〔M がそう〕言うとき偉大な声聞であるその P は沈黙してしまいました。

その時、正しく完全に覚った尊敬に値するそのプラバーケートゥ如来は、M 法王子に次のように仰せになる。『M よ、それを聞けば菩薩大士が無上正等覚から退転しなくなるような法の門 (\*dharmadvāra)<sup>(55)</sup>に関して、この集会〔にいる人たち〕に、少しばかり、汝は説きな

さい』[P 289a]

〔M が〕申し上げる。『世尊よ、<sup>(56→)</sup>一切の法の門に関するすべての教説は遠離(\*viveka)の門であり、それらの遠離の門は遠離そのものであると説きます<sup>←(56)</sup>』

### VI-3 シャーリプトラの回想(3) ダルママティの問い、遠離の門

また、その時、ダルママティ(\*Dharmamati、以下 Dh)<sup>(57)</sup>という名の菩薩がその集会にやって来ていました。坐っている彼は、M 法王子に次のように言いました。『M よ、如来は貪りと怒りと愚かさ(貪瞋癡)を説かれましたが、それらは遠離の門であり、<sup>(58→)</sup>遠離そのものであると説かれた<sup>←(58)</sup>のではないですか』

〔M が〕言う。『良家の子よ、このことをどう思いますか。貪り・怒り・愚かさは何から生じますか』

〔Dh が〕言う。『M よ、貪り・怒り・愚かさは構想(\*kalpa)・分別(\*vikalpa)から生じます』

〔M が〕言う。『良家 [H 410a] の子よ、[Zh 689] 構想・分別は何から生じますか』

〔Dh が〕言う。『M よ、構想・分別は顛倒した考え(\*viparyāsa)から生じます』

〔M が〕言う。『良家の子よ、顛倒した考えは何から生じますか』<sup>(59)</sup>

〔Dh が〕言う。『M よ、顛倒した考えは、<sup>(60→)</sup>「私」への執着、「私のもの」への執着<sup>←(60)</sup>から生じます』

〔M が〕言う。『良家の子よ、「私」への執着、「私のもの」への執着は何から生じますか』

〔Dh が〕言う。『M よ、「私」への執着、「私のもの」への執着は有身見(\*satkāyadr̥ṣṭi 身体を實有(の我)であるとする見解)<sup>(61)</sup>から生じます』

〔M が〕言う。『良家の子よ、有身見は何から生じますか』

〔Dh が〕言う。『M よ、有身見は我(\*ātman)から生じます』

〔M が〕言う。『良家の子よ、我は何から生じますか』

〔Dh が〕言う。『M よ、<sup>(62→)</sup>我はいかなるものからも生じません。不生が我の生起なのです。<sup>←(62)</sup>なぜなら、このように、我は、十方に求めたとしても、対象として捉えられない(\*anupalabhya)ものだからです』

〔M が〕言う。『良家の子よ、十方に求めたとしても対象として捉えられないような法に、門というものが何かあるでしょうか』

<sup>(63→)</sup>〔Dh が〕言う。『M よ、遠離こそがその門です』

〔M が〕言う。『良家の子よ、遠離とは何の門ですか』<sup>←(63)</sup>

〔Dh が〕言う。『M よ、無門こそが遠離の門です』

〔M が〕言う。『良家の子よ、私はそのことを [P 289b] 考えて、「一切の法の [H 410b] 門に関するすべての教説は遠離の門であり、<sup>(64→)</sup>それらは遠離そのものであると説く<sup>←(64)</sup>』と言



ったのです』

この教説が語られた時、八百<sup>(65)</sup>の菩薩たちは、無生法忍 (\*anutpattikadharmakṣānti) を獲得しました。

その時、M 法王子は、そこで詳しく法を説き示して後、座から立ち、去って行きました。

具寿 S よ、このような理由から (\*anena paryāyena)、声聞や独覚<sup>(66)</sup>は [Zh 690] 誰でも、かの M 法王子の弁才の流れを中断することは出来ません。私たちのような者が、許可もなく、M 法王子と話をすることなど出来るはずがありません」

#### VI-4 シャーリプトラの回想(4) マンジュシュリーとシャーリプトラの神通くらべ

その時、具寿 S は、具寿シャーリプトラ (以下、Ś) にこう言った。「具寿 Ś は、M 法王子が仏国土に出掛けて (\*caryāṃ carati) いた時、神通力と神変 (\*prātihārya) の自由な発揮 (\*vikurvita) をどれだけ見ていますか」

Ś が言う。「具寿 S よ、私は [次のようなことを] 思い出します。M 法王子と一緒に [西の方角において]<sup>(67)</sup> 仏国土に出掛けていた時、それらの燃え上がっている<sup>(68)</sup> 仏国土に<sup>(69)</sup> M 法王子が行くと、水で一杯になり、沢山の蓮華 (\*padma) ですっかり覆われていました<sup>←69)</sup>。水で一杯になったところ (仏国土) は、[H 411a] [逆に] 火で一杯になっていました。その火は触れると、たとえば、ウラガサーラ梅檀 (\*uragasāracandana)<sup>(70)</sup> [を薫きこめた涼やかな、柔らかく手触りのいい感触の] カーチャリンディカ (\*kācalindika) 衣<sup>(71)</sup> のようでした。空っぽの空間 (\*śūnya-ākāśa) となってしまったところ (仏国土) は、ブラフマー神 (梵天) の宮殿 (\*vimāna) で飾られ、禅定に深く入っている (\*dhyānasamāpanna) 菩薩たちで一杯になっていました。

成立しつつあるところ (仏国土)<sup>(72)</sup> が、壊れていくのが見えました。悪い生存状態 (悪趣) で満ちているところ (仏国土) が、すべての悪い生存状態から離れて行くのが見えました。それらの衆生は、<sup>(73)</sup> 悟りへの要目 (\*bodhyaṅga 覚支) という [瞑想の] 種類 (\*prakāra) によって生じる慈心 (\*maitri)<sup>←73)</sup> を獲得しました。悟りへの要目という [瞑想の] 種類によって [P 290a] 生じる慈心とは何かと言えば、深い精神集中の中で、『私はこの上ない正しい完全な悟りを覚り (仏陀となって)、[Zh 691] 貪りと怒りと愚かさという煩惱に悩まされている衆生の貪りと怒りと愚かさを完全に捨て去るために教えを説く』と考えることです。そのように慈心の三昧に深く入っていくことが悟りへの要目という [瞑想の] 種類によって生じる慈心なのです。

具寿 S よ、その時、その時点で、[H 411b] 私の心に、『M 法王子の神通と私のそれと、両者は同じだ』という思い (\*vikalpa) が生じました。すると、M 法王子の心は、私の心の思いを知って、この三千大千世界に火が燃え上ががっているとき、その世界の真ん中に身を置いて、私にこう言いました。『具寿 Ś の神通の威力でこの世界から [外に] 渡って [出て] 行く

べきでしょうか、それとも、私の神通の威力によって渡るべきでしょうか』

私は彼にこう言いました。『私の神通の威力の強さによってこの世界を渡るべきです』

具寿 S よ、私は、〔自分の〕神通の威力の強さという神変 (\*prātihārya) をすべて発揮しました。周囲一尋 (\*vyāma) の火が消えて、M 法王子と共に、7 日かけてその世界を渡り〔抜け〕ました。その後、別のある時に、彼は、とても広大な世界に火が燃え上っている時に、〔その〕世界の真真中に M 法王子は身を置いて、私にこう言いました。『大徳 Ś よ、誰の神通の威力でこの世界から〔外に〕渡って〔出て〕行くべきでしょうか』

私は彼に [Zh692] [H 412a] こう言いました。『M よ、あなたの神通の威力で [P 290b] この世界から〔外に〕渡って〔出て〕行くべきです』

さて、M 法王子は、<sup>(74)</sup>→形成力 (\*saṃskāra) の現前という神通を、ただ一度心を起こすだけで<sup>←(74)</sup>、<sup>(75)</sup>→その世界を蓮華の網で覆って (\*padmajālasaṃchanna) 渡りました<sup>←(75)</sup>。渡り終わると、私にこう言いました。『大徳 Ś よ、私たち二人のうち、どちらに、威力ある神通の速さ・強さがあるでしょうか』

私は彼にこう言いました。<sup>(78)</sup>→『M よ、これをどう思いますか。尾のある〔普通の〕鳥<sup>(76)</sup>と鳥の王であるガルダ (\*garuḍa) では、どちらの威力がはるかに強いですか』

〔M が〕言う。『<sup>(77)</sup>→大徳 Ś よ、鳥の王たるガルダの威力の強さは、限りがなく、〔何かに〕喩えることは容易ではありません。』<sup>←(77)</sup>

それに対して、私はこう言いました。『M よ、<sup>←(78)</sup>尾のある鳥の強さになぞらえられるのが、私の神通の強さだと見るべきです。鳥の王たるガルダの威力のあの強さよりも、何十万倍もはるかに勝れているのが貴方の神通の強さだと見るべきです』

彼 (M) は言う。『大徳 Ś よ、あなたの心の思いは、「M 法王子の神通と、自分の神通と、両者は [H 412b] 同じだ」ということではありませんでしたか』

私は彼にこう言いました。『M 法王子よ、仰る通りです。私はそう考えました』

彼が言う。『どうして、そう考えたのですか』

私は彼にこう言いました。『声聞たちは習気 (\*vāsanā 業の潜在的余力) の束縛を断ち切っていないので、等しくはないのに、等しいと私自身、理解してしまいました』

#### VI-5 シャーリプトラの回想(5) マンジュシュリーが告げるシャーリプトラとの前世の因縁

彼が言う。『大徳 Ś よ、よろしい、よろしい。あなたの言う通りです。[Zh 693] なぜなら、大徳 Ś よ、〔遠く〕過ぎ去った昔のことですが、〔ある〕大海のほとりに、ダルマカーマ (\*Dharmakāma 法を求める者)<sup>(79)</sup>といい、サルヴァダダ (\*Sarvadada すべてを与える者)<sup>(80)</sup>という二人の仙人が住んでいました。そのうち、ダルマカーマは五神通を得て、[P 291a] 自由に移動 (\*vikrīḍita 遊戯) していました。サルヴァダダは、明呪 (\*vidyā) や呪句 (\*mantra) の威力によって、上空を飛んでいました。さて、その二人は、時々ですが、行のために、

海のこちら側の岸から向こうの岸へと、行きました。行っては、戻って来て、それぞれの住まいに居ました。その時、サルヴァダダ仙人は、「私の神通と、ダルマカーマのそれと、両者は同じだ」と考えました。さて、別のある時、〔彼らは〕海のこちら側の岸から向こう岸に向かいました。羅刹女の島（\*rākṣasīdvīpa）に着くと、そこで、羅刹女たちが心地よい楽器の音を奏でたのをサルヴァダダ仙人は耳にし、[H 413a] 羅刹女たちを目にして、[恐ろしくなっ]て<sup>(81)</sup>空中から地上へと落下して行きました。彼の明呪も呪句も効力のないものとなりました。その時、ダルマカーマは、憐れみの心（\*kāruṇyacitta）が湧いてきて、〔彼の〕右手をつかまえて、再び、〔彼〕自身の住まいに連れてきて〔そこに〕置きました。

大徳 Ś よ、その時、その時点において、かのダルマカーマ仙人は誰か他の人であるとあなたが疑ったり、疑念（\*vimati）を懐いたりするならば、そのように見てはなりません。なぜなら、私こそが、その時、その時点において、ダルマカーマ仙人だったのです。大徳 Ś よ、その時、その時点において、かのサルヴァダダ仙人は誰か他の人であるとあなたが疑ったり、疑念を懐いたりするならば、そのように見てはなりません。なぜなら、あなたこそが、その時、その時点において、サルヴァダダ仙人だったのです。具寿 Ś<sup>(82)</sup> よ、その時もまた、[Zh 694] 同じではないものを、自分と同じだとしてしまったのです。そのように、彼は部分的な知をもっていたので、今もまた同じようではないものを、自分と同じだとしてしまったのです。』

#### VI-6 シャーリプトラの回想(6) 「客塵煩惱・心性本淨」の教え

具寿 Ś は、具寿 S にこう言いました。「具寿 S よ、私は〔次のようなことを〕思い出します。M 法王子と一緒に南の方角において [H 413b] 仏国土に出掛けていた時、百・千コーティ・ナユタもの多くの仏国土を過ぎたところに、[P 291b] 『あらゆる飾りに覆われた（\*Sarvālaṃkāravibhūṣita）』という世界〔がありそこ〕に、『宝の柱（\*Ratnayaṣṭi）』<sup>(83)</sup> という如来・世尊〔がおられますが、そ〕の仏国土においてかの世尊に会い、挨拶をし、奉仕をするために、行きました。

その時、M 法王子は私にこう言いました。『大徳 Ś よ、あなたは、私たちが渡ってきた諸仏国土を見ましたか』

私は彼にこう言いました。『M よ、見ました』

彼が言う。『大徳 Ś よ、それらの仏国土はどのように見えましたか』

私は彼にこう言う。『あるものは火で一杯でした。<sup>(84)</sup>あるものは水で一杯でした<sup>←84)</sup>。あるものは〔空っぽ〕の空間（\*ākāśa）になっていました。<sup>(85)</sup>あるものは富み栄えていました<sup>←85)</sup>。<sup>(87)</sup>あるものは破壊されていました。<sup>(84)</sup>あるものは成立しつつありました<sup>←86)</sup>。あるものは悪い生存状態（\*durgati）で一杯でした。あるものは悪い生存状態から離れていました。<sup>←87)</sup>』

〔M が〕言う。『具寿 Ś よ、それらの仏国土をどのように見るべきでしょうか』

私は彼にこう言う。『火で一杯になっているものは、まさに火で一杯になっていると見るべ

きです。[Zh 695] 水で一杯になっているものは、まさに水で一杯になっている [H 414a] と見るべきです。[空っぽの] 空間になっているものはまさに [空っぽの] 空間になっていると見るべきです。富み栄えているものは、まさに富み栄えていると見るべきです。<sup>(88)</sup> 成立しつつあるものは、まさに成立しつつあると見るべきです。悪い生存状態で一杯になっているものは、まさに悪い生存状態になっていると見るべきです。悪い生存状態から離れているものは、まさに悪い生存状態から離れていると見るべきです<sup>(88)</sup>』

彼が言う。『具寿 Ś の知の領域 (\*jñānaviṣaya) は話された通りです』

私は彼にこう言う。『M よ、あなたは仏国土をどのように見るのですか』

彼が言う。『具寿 Ś よ、すべての仏国土は [空っぽの] 空間 (\*ākāśa) のようなものと見ます。[P 292a] なぜなら、つまり、火で一杯であろうと、水で一杯であろうと、富み栄えていようと、<sup>(89)</sup> 破壊されていようと、成立しつつあろうと、悪い生存状態で一杯であろうと、悪い生存状態から離れていようと<sup>(89)</sup>、<sup>(90)</sup> それらは実在ではない (\*abhūta) のです<sup>(90)</sup>。諸々の縁が外来のもの (\*āgabtuka) として (偶然に) 現れているのです。生じつつあるものは滅を孕んでいます。空間は縁によって生じるものではありません。本性としてまさにそのようにあるのです。同様に、[H 414b] <sup>(91)</sup> 外来のものである煩惱 (\*āgantuka-upakleśa 客塵煩惱) によって心は汚されるのです<sup>(91)</sup>。心の本性は決して汚されることはありません。具寿 Ś よ、たとえば、過去において、ガンガー河の砂の数ほどの [無数の] 劫に渡って、[仏国土が] 燃え上がっていたとしても、空間が燃えることはかつてありませんでした。具寿 Ś よ、[Zh 696] それと同じように、それぞれの生き物 (\*sattva) が、ガンガー河の砂の数ほどの [無数の] 不善の業 (\*akuśalakarma) を形成したとしても、心の本性 (\*cittaprakṛti) は、そのように、汚されることは決してありません。具寿 Ś よ、良家の子や良家の娘の誰であれ、そのような本性として清浄な (\*prakṛtipariśudda) 法界に入るならば、彼らは、纏わりつくもの (\*paryavasthāna) や覆うもの (\*nīvaraṇa) [などと表現される煩惱] が形成力によって発動することなど、いささかもありません。これが「[潜勢的な煩惱が] 発動しない法の門 (\*aparyavashānadharmadvāra)<sup>(92)</sup>」なのです。その法の門に依ることで菩薩大士たちはすべての法の本性が清浄であることに悟入し、過失 (\*doṣa) がら生じるものを巧みに理解し、その心は、いかなる時も、覆う働きをする諸法によって覆われることがないでしょう。

具寿 S よ、M 法王子の神通の自由な発揮 (\*ṛddhivikurvita) と法の教示の自由な発揮 (\*dharmadeśanāvikurvita) の中で、[H 415a] 私がわずかながら目の当たりにしたものは、このようなものです。[これは菩薩すら達することの出来ない境地であり、まして声聞には不可能なことです。]<sup>(93)</sup>』

## VII-1 アーナンダの回想(1) シュラーヴァスティーのマンジュシュリー

その時、具寿アーナンダ (\*Ānanda) は、具寿 Ś にこのように言う。「具寿 Ś よ、私もまた、

M 法王子の神通の神変 (\*ṛddhiprātihārya) を、[P 292b] いくつか、目の当たりにしました。具寿 Ś よ、私は「次のようなことを」思い出します。ある時、世尊は、シュラーヴァスティーはジェータ太子の林、アナータピンディカの、まさにこの園林において、八百人<sup>(94)</sup>の比丘から成る比丘の大僧団と一万二千人の菩薩たちとともに、滞在しておられました。その時、シュラーヴァスティーにおいて、ある季節外れ (\*akāla) の大雲が発生しました。その時、[Zh 697] 七日間、途切れることなく、季節外れの大雨が降りました。その時、神通が大きく、威力のある禅定、解脱、三昧 (\*samādhi)、正受 (\*samāpatti) を獲得している比丘たちは、<sup>(95)→</sup>禅定、解脱、三昧、正受によって、〔七日の〕時を〔うまく〕やり過ぎしました<sup>←(95)</sup>が、<sup>(96)→</sup>獲得していない人たちは、七日七夜 (\*sapta-ahorātra) の間、絶食することになりました。それ故、それらの比丘たちは、痩せ衰えてしまいました<sup>←(96)</sup>。〔彼らは〕世尊に会いに行くことも出来なくなったので、その時、私は [H 415b] こう考えました。『ああ、これらの比丘たちは、苦境に陥っているので、私が世尊のところに行って、それらの様子を申し上げよう』こう考えて、私は、世尊のところに行きました。行って、世尊の両足に頭を付けて礼拝し、世尊にこう申し上げました。『ああ、世尊よ、これらの比丘たちは七日七夜<sup>(97)</sup>の間、食を断たれ、餓えのために痩せ衰えてしまい、苦境に陥り、寝台や椅子<sup>(98)</sup>から立ち上がって世尊にお会いしに来ることが出来なくなってしまっています』

その時、世尊は、私にこう仰せになられました。『アーナンダよ、行って、M 法王子にそれらの様子を告げなさい。彼が<sup>(99)→</sup>比丘の僧団に〔食を〕給してくれるであろう<sup>←(99)</sup>』

私は世尊の仰せに従って (\*pratiśrutvā)、M 法王子のいる僧房 (\*vihāra) に行きました。行ってみると、その時、M 法王子が自らの僧坊で、シャクラ神 (帝釈)、[P 293a] ブラフマー神 (梵天)、ローカパーラ神 (護世) たちに法を説いているのが見えました。

<sup>(100)→</sup>その M 法王子は、[Zh 698] 私が僧坊の中に入って来たのを見ました。見て、こう言いました。『大徳アーナンダよ、あなたは、何のために、〔これほどの〕風と雨の中をここまで [H 416a] 来たのですか』<sup>←(100)</sup>

<sup>(101)→</sup>私は、M 法王子にそれらの〔比丘たちの〕様子を言いました。<sup>←(101)</sup>彼は私に、『アーナンダよ、行って座具を敷いておき、<sup>(102)→</sup>正午になったら<sup>←(102)</sup>、木板 (\*ghaṇṭhā) を叩きなさい』と言ったので、私は、M 法王子の僧坊から出て、僧団の園林に行き、座具を準備し、『M 法王子は僧坊から出て来るだろうか』と、M 法王子の僧坊を見ながら、一隅で待っていました。

その時、M 法王子は、<sup>(103)→</sup>『すべての身体を現わす (\*sarvakāyavibhāvanā)』という三昧<sup>←(103)</sup>に入り、別の〔M 法王子の〕化人を化作し、〔その化人が〕それらのシャクラ神、ブラフマー神、ローカパーラ神たちに法を説いていました。<sup>(104)</sup>

彼は僧坊から出て、シュラーヴァスティーの大城 (\*mahānagara) に托鉢のために入りましたが、<sup>(105)→</sup>〔それが〕私には見えませんでした<sup>←(105)</sup>。



## VII-2 アーナンダの回想(2) マンジュシュリーと悪魔、托鉢をめぐる加持の応酬

その時、悪魔(\*Māra Pāpīyas、邪惡な魔、)は、『この M 法王子が師子吼(説法)し終わってから、シュラーヴァスティー大城に托鉢のために入る時、<sup>(106)</sup>私は、彼を困惑させて(\*vicakṣuḥkaraṇa) やろう<sup>←(106)</sup>』と考えた。そして、まさにその時、シュラーヴァスティー大城のバラモン、居士(\*gṛhapati)、郊外の人<sup>(107)</sup>、〔大城の〕周辺の人<sup>(108)</sup>は、どの人も、[H 416b] M 法王子〔の姿〕が見えず、誰も出迎えず、誰も〔托鉢の〕食を捧げることのないように、そのように加持(\*adhiṣṭhāna) されていました。その時、M 法王子は、どこに行こうとすべての所で、門が閉じられているように見え、[Zh 699] 誰も出迎えてはくれませんでした。そのとき、M 法王子は、『ああ、これらのバラモンや居士たちに [P 293b] 私〔の姿〕がまったく見えないとは、言うまでもなく悪魔の加持である』と考えました。

そしてその時に、『〔私には〕ガンガー河の砂の数ほどの〔無数の〕世界の悪魔たちには存在しない真実(\*satya)と真実の言葉(\*satyavacana)<sup>(109)</sup>があり、私の毛穴の一つ〔一つ〕には身体に生じた福德の集まりがある。その真実によって、真実の言葉によって、また、福德と智慧の資糧によって、これらの悪魔の加持が〔効か〕なくなりますように。その悪魔もまた、居士の姿で、通りや三叉路(\*śrīṅgāṭaka)や十字路(\*catvara)において、「M 法王子に〔托鉢の〕食を捧げなさい。捧げなさい。この方に捧げれば、〔その〕果報は大きいものになるでしょう。三千大千世界に属するすべての生き物(\*sattva)に、十万年の間、心地よいあらゆる資具(\*upakaraṇa, pariṣkāra)を供養し、尊敬し、敬意を表する [H 417a] よりも、M 法王子に、〔托鉢の〕食を、爪の先(\*nakhāgra)程でも捧げるならば、その福德の集まりの方がはるかに多大なものを生じるでしょう」と〔悪魔が〕〔大声で〕宣言しますように<sup>(110)</sup>』と、<sup>(111)</sup>真実の誓言(\*satyādhiṣṭhāna)を立てました<sup>←(111)</sup>。

M 法王子がその〔真実の〕誓言を立てるや否や、まさにその時に、すべての門が開きました。多くの人々(\*jana)すべてが、出迎えに出て来て、『M 法王子よ、ようこそおいでになりました(\*svāgatam)』と言いました。

悪魔自身も、居士の姿で、通りや三叉路や十字路において、『M 法王子に [Zh 700] 〔托鉢の〕食を捧げなさい。捧げなさい。この方に捧げれば、〔その〕果報は大きいものになるでしょう。三千大千世界に属するすべての生き物に、十万年の間、心地よいあらゆる資具を供養し、尊敬し、敬意を表するよりも、M 法王子に、〔托鉢の〕食を、爪の先程でも捧げるならば、その福德の集まりの方がはるかに [P 294a] 多大なものを生じるでしょう』と〔大声で〕宣言しました。

その時、M 法王子は、次のように、自分の鉢(\*pātra)に加持しました。つまり、その鉢に美味な食べ物(\*praṇītakhādyā)や飲み物が、繰り返し入れられ、〔入れられた〕それらはすべて [H 417b] まるで別々の器(\*bhājana)に盛られているかのように混ざらない状態がありました。<sup>(112)</sup>彼ら八百人の比丘たちと一万二千人の菩薩たちには、可能な限りの食べ物が



その鉢から渡されました。<sup>←112)</sup>。

さて、M 法王子は、シュラーヴァスティー大城に托鉢に行ってから、シュラーヴァスティー大城の外に出ると、道から逸れたところで、その鉢を地面に置いて、悪魔にこう言いました。

『パーピーヤスよ (\*Pāpiyan)、[浄人 (\*kalpiyakāraka, ārāmika) として]<sup>(113)</sup>この鉢を〔手に〕持って〔私の〕先を行きなさい』

その時、悪魔は、その鉢を地面から持ち上げようとしたが、持ち上げることは出来ず、彼は、M 法王子にこう言いました。『M よ、この鉢を地面から持ち上げることができません』

〔M が〕言う。『パーピーヤスよ、あなたも、大神通があり、大威力を持っているのですから、神通力によって、その鉢を地面から持ち上げなさい』

その時、悪魔は、[Zh 701] 神通力によるあらゆる神変を現しましたが、その鉢を地面から髪先の〔幅〕程の高ささえ持ち上げることは出来ず、奇異な気持ちを抱いて、M 法王子にこう言いました。『M よ、私が望めば、[H 418a] イーシャーダラ (\*Īśādhāra)<sup>(114)</sup>山をも手のひらに置いて虚空に投げ挙げるのに、私はこのように小さな鉢を、この地面から持ち上げることが出来ません。どうして、こうなったのでしょうか』

M が言う。『偉大な人 (\*mahāsattva)、偉大な方 (\*mahāpuruṣa) たちから引き寄せられた (\*akṛṣita) 力が、この鉢には積まれているので、それ故、あなたには持ち上げられないのです』[P 294b]

その時、M 法王子は、その鉢を地面から取り上げて、悪魔に渡してこう言いました。『パーピーヤスよ、[浄人として]<sup>(115)</sup>その鉢を〔手に〕持って〔私の〕先を行きなさい』

さて、悪魔は、<sup>(116→</sup>まるで弟子 (\*śiṣya) のように<sup>←116)</sup>、それを持って先に行きました。

その時、自在天子 (\*Vaśavartin Devaputra)<sup>(117)</sup>が、1万2千の天子に囲まれてその先頭に行きました。M 法王子のところにやって来て近くに行くと、M 法王子の両足に頭を付けて礼拝して、悪魔にこう言いました。『パーピーヤスよ、まるで使用人 (\*dāsa)<sup>(118)</sup>のように、M 法王子の先に行くのはなぜですか』

悪魔が言う。『天子よ、威力ある人たちと張り合うことは決してしません』

天子が言う。『パーピーヤスよ、あなたは大神通、大威力を [H 418b] お持ちです』

その時、M 法王子の加持によって、悪魔は自在天子にこう言いました。『天子よ、たとえば、魔 (\*Māra) の [Zh 702] 力は愚かさ (\*moha) の力であり、菩薩の力は智慧の力です。魔の力は我ありとの思い (\*ahaṃkāra) の力であり、<sup>(119→</sup>菩薩の力は知の力です。<sup>←119)</sup>魔の力は邪見の力であり、菩薩の力は空性<sup>(120)</sup>の力です。魔の力は顛倒の力であり、菩薩の力は真実 (\*satya)<sup>(121)</sup>の力です。魔の力は自分のもの<sup>(122)</sup>という力であり、菩薩の力は仁慈と大悲の力です。魔の力は貪り・怒り・愚かさの力であり、菩薩の力は三解脱門の力です。魔の力は [P 295a] 生と死と生起の力であり、菩薩の力は<sup>(123→</sup>不生と不起の法への容認 (無生法忍)<sup>←123)</sup>の力です』

悪魔がこの教説を語っている時、天子たちの中から五百の天子たちが、無上正等覚へと心を起こしました。二百の菩薩たちが無生法忍を獲得しました<sup>(124)</sup>

### 3 文殊の人物像、とくにその神通・神変について

本經における文殊（マンジュシュリー）の人物像を検討するに当たり、事前の準備として、初期大乘經典に登場する文殊に付与された人物像をまず概観してみよう。簡潔に示せば、以下のようなになる<sup>(125)</sup>。

- 1 仏陀と同じ規模の神通・神変を発揮する「高位の菩薩」の代表である<sup>(126)</sup>。
- 2 諸仏国土を巡歴し、諸仏の仏国土とその説法内容に通じている。
- 3 永劫にわたる菩薩行の実践者である。
- 4 空・不二の思想によって人々を教え導く教誡者である。
- 5 諸仏の父母・善知識であり、釈尊を含むあらゆる仏陀の指導者（恩人）である。

上記の分析をもとに主要な初期大乘經典と文殊との関係を見てみよう。

『阿闍世王經』にはすべての要素が見られるが、中でも特徴的なのは5の要素である<sup>(127)</sup>。また、經全体としては4の教誡者の側面、つまり、父殺しで苦悩する阿闍世王の指導者・救済者の側面が強調され、これが經の主要テーマとなっている。『首楞嚴三昧經』には5以外の要素が見られるが、3の要素において、「すでに仏陀として涅槃に入っているが、独覺と自称しつつ再生し続け、人々に法を説く」という側面が他の經典には見られない大きな特徴となっている。文殊の菩薩としてのこれらの特性は「首楞嚴三昧」に依るものであるとされ<sup>(128)</sup>、この三昧が經の主題になっている。

一方、『維摩經』では、文殊ではなく、維摩の方に1、3、4の要素が見られる。主役はあくまで維摩であり<sup>(129)</sup>、文殊は維摩の勝れた対論者として、實質上は4の要素に局限された役回りに止まっている。同じく文殊系の經典とされる『思益梵天所問經』では、經の前半は網明菩薩が空・不二の教えに関して問答し放光の神変を示すのに対し、文殊は後半になって、網明と入れ替わる形で登場するに過ぎない。しかもその特性はやはり4の要素に止まっている。さらに『法華經』になると、その「序品」において、いわば經の主人公たる釈尊が示した神変の意味の解説者として上記2の要素を担って登場するに過ぎない<sup>(130)</sup>。これら3經典において文殊の重要性が低下して見えるのは、当該經典の編纂時には、上記に挙げた文殊にまつわるイメージがある程度定着し一般化して、そのうちのいくつかの要素・特性に注目して文殊を登場させているからだと考えられる。

これに対して、最初に挙げた『阿闍世王經』『首楞嚴三昧經』や、光川豊藝氏が論究した一連の文殊に関する諸經典（それぞれの作成時期は古いものから比較的後期のものまで含まれる）では、文殊の人物像をむしろ形成する、あるいはそのイメージが定着しつつあった時期の

ものと想定される。あるいは定着し始めたイメージを整理し説明する意図のもとに作成されたと考えることもできよう<sup>(131)</sup>。

さて、本経に見られる文殊の特性は、上掲の要素で言えば、その1、2、4に相当する<sup>(132)</sup>。中でも、特に、1の神通・神変の発揮者、強力な加持の保持者としての文殊を称讃するのがこの経の主意と見てよいだろう<sup>(133)</sup>。

具体的に、この第2巻に見られる「神通・神変」を見て見よう<sup>(134)</sup>。

(1) VI-1で、文殊はその咳払いの音で、梵天界で説法していた智慧第一とされる大声聞を地上に墜落させた、とする。神通としては小規模なものようであるが、例えば『マハーヴァストゥ』には「その後マーラは……菩薩(釈尊)の咳払いの音で(ukkāsitaśabdena)打ち負かされた」とあり、『法華経』にも「(釈尊とその他の多くの如来たちは)師子の〔のような〕大きな咳払いの音(mahāsimhotkāśanaśabda)をさせ、一つの指弾きの音(acchaṭṭa-saṃghātaśabda)をさせ(あらゆる仏国土を震動させた)」<sup>(135)</sup>とあり、釈尊(菩薩、仏陀)の神通力の一つとされる。

(2) VI-4において、文殊とシャーリプトラとで神通の威力を競べ合う。智慧第一のシャーリプトラとはいえ声聞との神通競べをする、という設定は、この経の作成者にとって、文殊に帰せられる神通力が仏陀・釈尊に比べるとそれほど大きいものではなかったことを予想させる。とはいえ、その規模は決して小さくはない。シャーリプトラを伴って巡歴した仏国土には、「燃え上がった」ところ、「水で一杯になった」ところ、「空っぽの空間になってしまった」ところ、「生じつつある」ところ、「壊れていく」ところがあった、とする。これは劫滅時に発生する「火災・水災・風災」の「大の三災」、あるいは「壊劫・空劫・成劫・住劫」といった「終末論・宇宙論」を前提にしていると思われる<sup>(136)</sup>。こららの仏国土の様子は文殊が行くことで、火は水(蓮華の網で覆われた水)に、水は火(香氣漂う柔らかな布のような感触の火)に、空っぽの空間は梵天の宮殿があり深い禅定に入った菩薩で一杯になる等、全く逆の状態に変化したのである。次のVI-5では、文殊とシャーリプトラの前世における因縁が神通力の相違の説明として示されるが、両者の力の相違は圧倒的に異なる、というものではない<sup>(137)</sup>。

(3) VIIは、アーナンダの回想であるが、シュラーヴァスティーの町は時ならぬ風雨に襲われ、比丘たちは飢餓に瀕するが、釈尊の指示により、比丘たちへの食の供給を文殊に要請する。VII-2において、食を得るため町に出た文殊を悪魔が困惑させようとして、文殊の姿が誰にも見えないように加持する<sup>(138)</sup>。それを察知した文殊は、逆にその加持を解いて、悪魔を自分の意のままに、発言させ、行動させる。文殊は一方で鉢に持って出ている自分の鉢に加持して、食が中に沢山、しかも混じり合わないように入るようにし、また僧団のすべての比丘・菩薩にその食が行き渡るようにする。さらに、文殊はその鉢を地面に置いてから悪魔にそれを持ち上げるように指示するが、悪魔は持ち上げられない。文殊は、それは「偉大な人(\*mahāsattva)、偉大な方(\*mahāpuruṣa)たちから引き寄せられた力が、この鉢には積ま

れている」から、とする。

#### 4 おわりに

『大品般若經』『法華經』『維摩經』『入法界品』などの主要な初期大乘經典に文殊菩薩は重要な役割を果たしているが、弥勒、観音、普賢等の他の英雄的菩薩に比べると、その付与される特性は多彩である。また、いわゆる文殊系經典とされるものの数も多く、その中では一層多彩な性格を付与されている。

梶山雄一博士の研究は大乘の宇宙論と如来の神変とを救済という観点から関連づけ、『大品般若經』などによる仏陀の慈悲による無差別の救済を浄土の他力思想の先蹤となるものとされたが、論考の主題から見れば周辺の事項である文殊菩薩の特性については詳細に論じてはおられない。一方、光川豊藝博士は、長期に渡って文殊および文殊系經典（その多くは竺法護訳に始まる經典群）について精密な考察を続けられ、文殊の特性についても深い分析をなされたが、文殊系經典以外の大乘經典との文殊を介した関係については殆ど言及なされておられない。一方、ハリソン博士は、支婁迦讖訳經典（支讖訳と判定される 9 訳のうち 6 訳）に見られる文殊について「神聖菩薩 (celestial bodhisattva)」の概念の検証という観点から精査なされている。本經のチベット訳第 3 卷、第 4 卷においても文殊による菩薩の神変（神通と教誡）の記述は続くので、上記の学的資産を土台に文殊の神変をテーマとした本經の研究を続けて行きたいと願っている。

##### 〔略号〕

- AA *The Aśokāvadāna : Sanskrit Text Compared with Chinese Versions, edited annotated and partly translated by Sujitkumar Mukhopadhyaya, New Delhi, 1963.*
- AD *The Practical Sanskrit-English Dictionary, by Prin. Vaman Shivaram Apte, Revized & Enlarged Edition, Kyoto, 1978 (臨川書店).*
- BHSD *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Volume II: Dictionary, by Franklin Edgerton, New Haven, 1953; reprint Delhi, 1970.*
- Gv *Gaṇḍavyūhasūtra, edited by P. L. Vaidya, BST No. 5, Darbhanga, 1960.*
- KP *Kāśyapaṭarivarta, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1934; The Kāśyapaṭarivarta Romanized Text and Facsimiles, M.I. Vorobyova-Desyatovskaya (ed.), Tokyo, 2002.*
- Krp *Karuṇāpūṇḍarika, edited with Introduction and Notes by Isshi Yamada, Vol. II, London, 1968.*
- LV *Lalitavistara, edited by P. L. Vaidya, BST No. 1, Darbhanga, 1958.*
- MN *Majjhima-Nikāya, 3 vols, PTS., London, 1887-1902.*
- Mvy *Mahāvīyūtpatti : 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木學術財団、1916.*
- Śikṣ *Śikṣasamuccaya, edited by P. L. Vaidya, BST No. 11, Darbhanga, 1961.*
- SN *Saṃyutta-Nikāya, 5 vols, PTS., London, 1884-1898.*
- SP *Saddharmapūṇḍarikasūtra, Kern and Nanjio (eds.), St. Pétersburg, 1912.*
- TD 西藏佛教研究会『藏文辞典、グシェー・チョエ・タクパ著、民族出版社1957年；山喜房佛書

林 1972年。

VKN *Vimalakīrtinirdeśa, Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations*, edited by Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University, 2004.

『俱索』 『俱舍論索引 第一部』 平川彰等共著、大蔵出版、1973年。

『広説』 『広説 佛教語大辞典』 中村元著、東京書籍、2001年、縮刷版 2010年。

#### 〔参考文献〕

小澤憲珠 [1997]: 『大乘經典解説事典』 「9 文殊部」 (257-278頁) 北辰堂。

梶山雄一 [2012]: 『梶山雄一著作集第三卷 神変と仏陀観・宇宙論』 (吹田隆道編) 春秋社。

五島清隆 [2011]: 「チベット訳『梵天所問経』一和訳と訳注(3)」 『インド学チベット学研究』 #15、196-230頁。

—— [2013a]: 「チベット訳『宝篋经』一和訳と訳注(1)」 『佛教大学 仏教学部論集』 #97、29-56頁。

—— [2013b]: 「チベット訳『梵天所問経』一和訳と訳注(5)」 『インド学チベット学研究』 #17 (未刊)

—— [2014]: 「チベット訳『文殊師利巡行经』一和訳と訳注」 『佛教大学 仏学会紀要』 #19 (未刊)

定方 晟 [1989]: 『阿闍世のさと一仏と文殊の空のおしえ』 人文書院。

高崎直道 [1974]: 『如来蔵思想の形成』 春秋社。

丹治昭義 [1974]: 『大乘仏典 7』 「首楞嚴三昧经」 中央公論社。

平川 彰 [1995]: 「文殊師利法王子の意味と一生補処」 『印度哲学仏教学』 #10、1-20頁。

光川豊藝 [1985a]: 「宝積经「大神变会」の研究—三種神変と菩薩の行について」 『龍谷紀要』 #7(1)、163-179頁。

—— [1985b]: 「初期漢訳經典からみた大乘仏教—支識訳「阿闍世王经」の場合」 『佛教文化研究所紀要』 #24、30-43頁。

—— [1990]: 「文殊菩薩とその仏国土: 『文殊師利仏土嚴浄经』を中心に」 佛教學研究 #45/46、1-32頁。

—— [1991]: 「『諸仏要集经』にみられる文殊菩薩—とくに「有所得」と「女身」に関連して」 『龍谷大學論集』 #437、58-83頁。

—— [1995]: 「『文殊師利遊戯大乘经』の研究—文殊の gaṇikā (娼婦) への説教を中心にして」 『龍谷大學論集』 #446、99-129頁。

—— [1997]: 「文殊師利菩薩『所説经』の研究—文殊の説く教説と神変を中心に」 『龍谷大學論集』 #450、41-76頁。

—— [2000]: 「魔波旬と文殊菩薩による破魔—『仏説魔逆经』を中心にして」 『龍谷大學論集』 #455、83-118頁。

Harrison, Paul M. [2000]: "Mañjuśrī and the Cult of the Celestial Bodhisattvas." *Chung-Hwa Buddhist Journal* # 13.2, pp. 157-193.

Lamotte, Etienne [1960]: "Mañjuśrī." *T'oung Pao* # 48.1-3, pp. 1-96.

Williams, Paul [2009]: *Mahāyāna Buddhism: The Doctrinal Foundations*. New York, Routledge.

#### 〔注〕

- (1) 翻訳の資料として用いたチベット大蔵経 (写本: KPhT、版本: CDHNP) 及び漢訳大蔵経 (Ch1, Ch2) の詳細については、五島 [2013a] 47-48頁の注(1)参照。使用したチベット大蔵経の第2巻の丁数は以下の通り。



C:297a1-308b3, D:258a1-269a7, H:403a6-419a1, K:198a5-211a5, N:408b4-425a6,  
P:284b7-295a2, Ph:260a3-277b4, T:209a2-223b3.

このうち、Kにおいて、第203葉が $\alpha$ (gong)、 $\beta$ (og ma)と2回繰り返されるが、内容的に増減はない。また、Phは、271a8-273a1までが268a8-270a1の繰り返しになっている。異読、誤記、脱落の点で両者は微妙な食い違いを示すので、筆写の元本の段階で既に錯簡があったものと思われる。また、今回は『中華大藏經・甘珠爾』(蔵文版対勘本、全108冊、2008年)の第51冊所収の本經相当部分も参照した。この大藏經は上掲5版本の他、ユンロ(永楽)版、リタン版、ウルガ版の異読を挙げているが、版本5版のいずれかに見られるものばかりなので、いちいち言及することはしていない。ただし、活字で印字されており、参照するには便利と思われるので、その頁数(本經第2巻は679頁4行目~702頁15行目)を挙げておいた(Zhと表記する)。なお、[ ]は2漢訳またはその一方にのみ見られる一節であることを示す。その他の符合、記号については、第1巻(五島[2013a])での方式に準じる。

- (2) 先の第1巻IV節の末尾において、スプーティは、「法界を汝はどのように遍知するのか」という世尊の問いに答えられず、黙してしまっていた。
- (3) DHKNPT: smras, Ph: gsungs, C: rmas. Ch1: 有教.
- (4) Ch2: 以我本不修習無盡無礙辯故.
- (5) Tib: thogs pa dang bcas pa (\*sapratigha). Ch1, 2: 有礙.
- (6) Tib: bar chad dang bcas pa (\*sāntara). Ch1: 有限. 2: 有盡.
- (7) Tib: dmigs (\*upalabhate 知る、認知する).
- (8) Tib: 'o na ci'i phyir tshe dang ldan pa rab 'byor 'chad pa las bar chad du (K: 'chad dus) gyur. Ch1: 假使法界無限無礙, 賢者曷爲言默而礙. Ch2: 大德, 若其法界無障無礙, 汝今何故說時有礙.
- (9) Tib: 'chad pa bar (omitted in KT) chad pa yin gyi (CDHNPPPh: gyis).
- (10) Tib: 'tshad med pa.
- (11) Tib: chad par mi 'chad do.
- (12) Ch1: 其欲知盡法界者, 便以言說而爲罣礙. 若有了知法界無量不可盡者, 聞其所言則不爲礙. Ch2: 文殊師利, 我已證斷故辯有礙. 若知法界而不證者, 則辯無礙.
- (13) Tib: nyan thos kyi yul tshad mar byas te.
- (14) CDHNP: tshad med par, KPhT: chad med par. 後者に従えば「断ち切るもののないものとして」となる。
- (15) Ch1: 我限弟子所講說法而有盡礙. 觀於佛界而無有量. 講說法界而無盡時. Ch2: 聲聞境界有限齊故說時有斷. 佛之境界無限量故說無礙無滯. 漢訳は藏訳とかなり異なる。その趣旨は、<声聞の境界には限界(\*pramāṇa 大きさ)があるので弁舌にも断絶があるが、仏の境界には限界がない(\*apramāṇa)ので、法を説くときに尽きることなく滞することもない>ということである。この前後の所論には以下の『梵天所問經』の所説が参考になる。  
[シャーリプトラ、Ś] 長老が言う。「サマンタクスマ(S)よ、世尊の声聞(弟子)たちは、範圍(領域 \*viśaya)に応じて説くのです」[Sが] 言う。「大徳シャーリプトラよ、法界(\*dharma-madhātu)は、その範圍を計れるものでしょうか」[Śが] 言う。「そのようなことはありません」[Sが] 言う。「長老シャーリプトラよ、では、どのように範圍に応じて説くのでしょうか」[Śが] 言う。「声聞は[自らが]理解した分についてそれだけを説くのです」[Sが] 言う。「長老は、法界にはその範圍が無量(\*apramāṇa)であるという特相(\*ākāra)があることを理解していますか」[Śが] 言う。「良家の子よ、そのように[理解しています]」[Sが] 言う。「法界には量の基準(\*pramāṇa)というものが存在しないので、法界は無量なのです。大徳シャーリプトラよ、[そういう]無量の理解に応じて無量を説くのであって、それをどうして[あなたは自分が]理解したことにしたがって、その通りに説く[と範圍を区切って言う]のでしょうか」[Śが] 言う。「サマンタクスマよ、法界には理解という特質(\*lakṣaṇa)はあり



- ません」(sec. XI-1五島 [2011] 198-199頁)
- (16) Ch1: 云何, 須菩提, 法寧復有境界說乎. 其有於法作境界者, 說法則有分數. Ch2: 法界有生耶.
- (17) Tib: 'o na ci'i phyir tshe dang ldan pa rab 'byor 'chad pa bar chad. Ch1: 賢者, 云何言默而礙. Ch2: 得無礙辯何故默然.
- (18) Tib: ye shes kyi dbyings. Ch1: 其智慧者. Ch2: 是智境界.
- (19) Cf. AA 88.19-20: 「彼(シャーリプトラ)は実に、第二の教主、法軍の将、法輪を転じる者であり、智慧ある者の中で最高だ (prajñāvatām agraḥ) と世尊によって示されている」 VKN ch. 6 sec. 9 「偉大な智慧をもつ者の最高である長老(シャーリプトラ)」 mhāprajñānām agryas sthaviṛaḥ. また、法界との関連では、<シャーリプトラは法界に通達しており (Sāriputtassa dhammadhātū suppaṭividdhā)、仏陀が異なる文章、異なる方法で質問しても、それに応じて異なる文章、異なる方法で、自由に答えることができる> (SN vol. II 56.4-29) とされている。
- (20) Ch1: 今欲宣之. Ch2: 須菩提言. 我今不説. Ch2は、直後の「なぜなら」以下に始まる文殊の偉大性の称讃を、シャーリプトラではなく、スプーティの回想とする.
- (21) Ch2: 我今何能於文殊師利前敢有所説.
- (22) Tib: dang ba can (\*prasādavati, prāsādika). Ch1: 喜信. Ch2: 端嚴.
- (23) Tib: 'od kyi tog (KT: dpal). Ch1: 光英. Ch2: 光相. Prabhāketuは、『維摩經』では「入不二法門」を説く32人の菩薩の一人として (VKN ch. 8 sec. 18)、『悲華經』では「クスマプラバ (Kusumaprabha)」という仏国土の如来として (Kp 390.2-3)、その名が挙げられている。KTでは原語として Prabhāsri が想定される。
- (24) Tib: shes rab sgron ma. Ch1: 聖智燈明. Ch2: 智燈. 想定される原語 Prajñāpradipa は、『入法界品』では、過去仏の名 (Gv ch. 34 v. 51) や理想的な菩薩の属性 (ch. 37 v. 15) として挙げられている。
- (25) Tib: nang du yang dag 'jog par gyur pa. Ch1: 閑居宴坐. Ch2: 入於寂定.
- (26) Tib: tshangs pa'i 'jig rten. Ch1: 第七梵天. Ch2: 梵世.
- (27) CDHNPPH: thams cad dang ldan pa'i stong gsum gyi stong chen po'i 'jig rten gyi khams 'dun par byas nas chos ston to. KT: stong gsum gyi stong chen po'i 'jig rten gyi khams thams cad sdud cing chos ston to. Ch1: 其聲遍告三千大千世界, 爲一切說法. Ch2: 以大音聲而演說法, 聲遍三千大千世界. KTでは「三千大千世界をすべて集めて法を説いていた」となる。
- (28) Tib: 'od gsal. Ch1, 2: 光音天. Skt. ābhāsvara は「より光輝く (ā-bhās-vara)」の意。漢訳では ābhā-svara と解釈されて「光音」とされる。「梵天」が色界の初禪 (六欲天の上にあるので第七天とされる) に位置するのに対し、「極光淨」は第二禪の最上位である第三天にある。
- (29) Tib: mgul (KT: lud pa) bsal (Ph: bstsal) ba'i sgra. Ch1: 大聲. Ch2: 大音聲. mgul bsal ba, mgul bstsal は「喉をきれいにする」の意、lud bsal ba は「痰(粘液)を取り除いて [きれいにする]」の意であり、いずれも「咳払い (Skt. utkāsana, utkāsita, Pāli. ukkāsana, ukkāsita)」のこと。BHSD utkāsana: a cough, or clearing of the throat. Cf. MN 161.17-23: 「そのとき、多くの比丘たちがランマカ・バラモン(assama)の修行場 (dhammī kathā) によって集まっていた。さて、世尊は門屋の外に立たれ、話が終わるのを待たれた。ときに、世尊は話が終わったことをお知らせになり、咳払いをなされ (ukkāsītva)、門を叩かれた。彼ら比丘たちは世尊のために門を開けた」
- (30) Tib: mgul (KT: lud pa) bsal (PPh: bstsal) ba'i sgra. Ch1: 洪音. Ch2: 大聲.
- (31) Tib: rnam par 'thor (KPh add ba'i) rlung. vairambha (毘藍風、毘嵐風) は、劫末・劫初に吹く、あらゆるものを破壊する暴風のこと。
- (32) Cf. SN vol. II 231.8-5: 「比丘たちよ、虚空の上方には (upari ākāse) ヴェーランパーという名の風 (verambā nāma vātā) が吹いている。ヴェーランパー風は、そこを通る鳥を吹き飛ばす。ヴェーランパー風に吹き飛ばされた鳥の足、羽、頭、胴体は、それぞれ別の方向に飛ばさ

れてしまう」

LV: パーピーヤスよ、今日お前は、追い散らされるだろう。ライオンに吼えられたジャッカルのように。パーピーヤスよ、今日お前は、追いやられるだろう。ヴァイランバの風に吹き飛ばされた鳥のように。

palāyīṣyase tvam adya pāpiyaṃ koṣṭuka iva sīṃhanādena /  
vidhuneṣyase tvam adya pāpiyaṃ vairambhavāyuvikṣipta iva pakṣī // (ch. 21 v. 152)

- (33) CDHNPPH: dngangs (Ph: sdangs) te spu zing zhes (omitted in Ph) byed par gyur nas ngo mtshar du bzung ste. KT: skyo zhing bspu langs par gyur nas ngo mtshar thob (K: thog) ste.
- (34) Ch1: 隨藍風. Ch2: 旋嵐風.
- (35) Tib: mtshan ma mdzad do. Ch1: 作感應. Ch2: 現相.
- (36) DHKT: lha'i bu de dag dang. Omitted in CNPPH. Ch1: 及諸天. Ch2: 諸天眷属.
- (37) Tib: bar snang. Ch1: 虚空. Cf. *AD* antikṣa: the intermediate region between heaven and earth, the air, atmosphere.
- (38) Ch1: 法座. Ch2: 蓮華師子座.
- (39) Ch2: 時智燈大聲聞問文殊師利.
- (40) Tib: don gyi dbang ci zhig mthong nas. Ch1: 欲何觀採. Ch2: 爲何利. *Śikṣ* 16.30: sa idam arthavaśaṃ sampaśyan. (Tib: de don gyi dbang 'di mthong bas.) Cf. *Mvy* 6685.
- (41) Ch2: 爾時文殊師利童子語大德智燈.
- (42) Ch1: 亦無身無意無心無禮無敬. 無卒無暴無壞無住. 不常得從空生無心行常寂寞. Ch2: 若身若心不低不仰. 若不低仰正直而住. 不動不搖. 其心寂靜行寂靜行.
- (43) Ch2: 不觀佛不觀法不觀僧.
- (44) KT: rang gi lus. CDHNPPH: gang gi lus. Ch2: 見於自身同入法性.
- (45) Tib: mthong ba la mthong bar mi mthong ba, log par mi mthong ba. Ch1: 所見亦無見無所見. Ch2: 見如不見.
- (46) Ch1: 其有欲問及問者, 彼無有二求度無極, 所問淨三道場. Ch2: 問者問處及問訊法俱不可得, 無所貪著於三世中求不可得, 如是三場清淨問訊. 「三輪清淨」は、施者(主体)・受者(客体)・施物(媒介物)の三つがそれぞれにあるいは相互の関係において清淨であることを示す用語. Ch2に見られるように、しばしば過去・現在・未来の三世への無執着(清淨、平等)と関連づけられる。たとえば『梵天所問經』には「ブラフマー神よ、その悟りとは、過去でもなく、未来でもなく、現在でもない。それゆえ、菩薩は、三世清淨相と三輪清淨によって悟りへと入るべきなのです」とある(五島 [2013b] sec. XXVII-2)。その他の用例については五島 [2013b] 注113参照。
- (47) Tib: zhu ba mchis pa la (Ph inserts ma) rtogs (K: rnogs, T: brnogs, Ph: brnegs) par mi bgyid pa. Ch1: 問無沈浮. Ch2: 若往來問答不求覺過.
- (48) Ch1: 所言柔順可如來意. Ch2: 隨順所問如來印可.
- (49) Tib: gzhan gyi sgra'i rjes su mos pa. Ch1: 以音而得解脫. Ch2: 我隨音聲從他.
- (50) Tib: gnyen po med pas rab tu phye ba. Ch2: 獨修無侶. rab tu phye ba は rab tu 'byed の過去形。想定される原語 prabhāyati には、*AD* によれば、to increase, to provide more fully, to recognize, to gain power or strength, to make powerful などの意味がある。ここでは to recognize の意にとって、rab tu phye (\*prabhāvita) を「〔それと〕認知される」、さらには「〔それと〕顕示される」の意に解した。この語を「顕示」と解することについては、高崎 [1974] 468頁参照。また、gnyen po (\*pratipakṣa) については次の『維摩經』の一節が参考になる。*VKN* ch3 sec. 6: 「〔法は虚空のように〕類例がない。対応物がないから」 asadr̥śo niṣpratipakṣatvāt.
- (51) これは文殊を讃嘆する言葉だが、逆に非難する言葉としては、例えば『文殊師利巡行經』では

- 「マンジュシュリー法王子を見てはいけない。マンジュシュリー法王子〔の言うこと〕を聞いてはいけない。マンジュシュリー法王子がいるところは棄て去らなければならない」(P Mu 277b6-7、五島 [2014] 参照) という表現がある。両者は無縁ではないであろう。
- (52) Tib: mtshan nyid gsum las ldog (KT: zlog) par 'gyur ro. Ch1: 彼亦造相. Ch2: 無三相。
- (53) Ch1: 諸聖賢所念但講無爲. Ch2: 修無爲故佛説名聖. 前後の文脈から「説く」主体を「私」と解した。Ch2は「仏は、無爲を修した人を聖人と名付ける」と読める。
- (54) Ch1: 無爲寧有念説耶. Ch2: 是無爲者可修習不。
- (55) Cf. *Kp* 187.2-3 「青年よ、如来は、以上のような、『資糧の清浄さの集積 (saṅgraha)』という名の輪廻を乗り越える教えの門 (dharmadvāra) を語られた」
- (56) Ch1: 其正法門者行寂寞. 於寂門無言説. 以恬然爲清浄. Ch2: 一切諸法是寂靜門. 一切言説是寂靜門, 示寂靜故。
- (57) Tib: chos kyi blo gros. Ch1: 法意. Ch2: 法勇。
- (58) KT: dben pa nyid du 'chad yin pa. CDHNPPH: dben pa'i sgo nyid du ston pa . Ch1: 其恬然門寧爲靜泊清浄法耶. Ch2: 是寂靜門示寂靜耶。
- (59) Ch2はここに「不正な精神集中 (\*ayoniśomanasikāra)」に関する問答を入れる。Ch2: 答言. 文殊, 住不正思念. 文殊又問. 不正思念爲住何處. (答言. 文殊, 住我我所.)
- (60) CDHNPPH: ngar 'dzin pa dang nga yir 'dzin pa. KT: nga dang nga'i zhes bya ba. . Ch1: 我所非我所. Ch2: 我我所。
- (61) 既に第一巻の注82 (五島 [2013a] 52頁) で指摘しているが、有身見に関する次の一節は参考になろう。*Śikṣ* 130.4-5 「たとえば、シャーンタマティよ、樹が根を断ち切られてしまった場合、その枝・葉・群葉はすべて枯れてしまう (śuṣyanti) が、ちょうどそのように、シャーンタマティよ、有身見が鎮まることによって、全ての煩惱は鎮静する (upaśāmyanti)」 Cf. *KP* sec. 137 v. 9 ab 「有身見から心が解放されている。〔そういう〕彼には、そこにおいて「私」とか「私の」という執着がない」 satkāyadrṣṭe hi vimuktamānaso ahaṃ mametiha na tasya bhoti.
- (62) Ch1: 吾我者不見所住, 亦無有處亦非無處. Ch2: 是我見者則無住處. 無處是我見處。
- (63) Omitted in Ch1. Ch2: 答言. 文殊, 都無有門. 文殊又問. 善男子, 而是寂靜頗有門不。
- (64) KT: de dag dben nyid 'chad do. CDHNPPH: de dag dben pa'i sgo nyid du ston to. Ch1: 一切所説而淡泊門靜然而致清浄. Ch2: 一切言説是寂靜門顯示寂靜。
- (65) Ch1: 八千。
- (66) Ch1: 弟子及菩薩. Ch2: 聲聞菩薩。
- (67) Ch2: 在於西方。
- (68) Tib: tshig pa. Ch1: 火起而燒刹. Ch2: 大火災起. Cf. *TD* tshig pa : me la tshig zin pa, 燃焼。
- (69) Tib: 'jam dpal gzhon nur gyur pa song ba dang chus yongs su gang zhing, padma mang pos yog par gnas par gyur to. Ch1: 便有自然蓮華遍布具足, 文殊師利蹈上而行. Ch2: 於彼火中作蓮華網, 文殊師利從中而過. チベット訳中の yog pa の解釈に『ラリタヴィスタラ』の次の一節が参考になる。菩薩が誕生する際にシュッドーダナ王の宮殿に生じた32の前兆の一つに関する記述である。LV 57.18-19: 「シュッドーダナ王の住まいは、宝石の網ですっかり覆われ、どこもかしこも火は燃えなかった」 ratnajālāparisphuṭaṃ (Tib H 69b2: rin po che'i dra bas yog pa) ca rājñāḥ śuddhodanasya grhaṃ samsthitam abhūt. vaiśvānaraśca na jvalati sma. これに関しては、注75参照。それによれば、yog は g'yogs であった可能性もある。また、Ch1では、文殊は蓮華の上を踏んで進んでいるが、これは、菩薩が歩むごとに蓮華が現れ、菩薩はその上を踏み進む、という伝承を踏まえたものであろう。Cf. *SP* 66.6-7: 「その仏国土においては菩薩たちは、その大半が、宝の蓮を踏み歩む者 (ratnapadmavikrāṇiṇaḥ) となるであろう」 *BHSD* ratnapadmavikrāmin: adj. walking on jewel-step lotuses, i.e., with such

lotuses appearing under their every step.

- (70) Tib: tsan dan sbrul gyi snying po. Ch1: 栴檀塗身及衣臥具. Ch2: 堅鞞栴檀塗身. Uragasār-acandana (蛇心栴檀) は香木の中でも特に香りが高いことがその特性とされる。『ラリタヴィスタラ』の次の詩頌は、この栴檀と衣との関係を暗示してくれる。

寒い〔季節〕には、香油によって暖かく、暑い〔季節〕にはウラガサーラ栴檀〔を薫き込められて涼やかな〕、それらのカーシー産の高級な衣服に、貴方は見向きもなさいません。王子よ、どこに行かれるのですか。

śīte ca uṣṇān anulepanāmbārāṃ uṣṇe ca tān uragasāracandanāṃ /  
tām kāśikāvastravarāmbārāṃ śubhāṃ nopekṣase deva kaḥiṃ gamiṣyasi // (LV sec. 15. v. 52)

なお、『法華經』では、一切衆生喜見菩薩が三昧に入ったとき、ウラガサーラ栴檀の雨が降ったとする (SP 406.8-9)。また、日月淨明德如來の遺体を荼毘に付すときに、このウラガ・サーラ栴檀を薪として積んでいる (SP 411.7)。

- (71) Tib: ka tsa lin di'i (KT: di, Ph 'di'i) gos (omitted in KT). Ch1: 細靡之衣好食美味香. Ch2: 臥迦尸衣柔軟適甚爲快樂. Ch2の「迦尸衣」は、前注 LV に見られる柔らかいカーシー産の高級衣のこと。この kācalindika の材料を、『広説』は「実可愛鳥」の羽毛とし、漢訳『正法念処經』の割注は「迦旃隣提海中之鳥」とし (Taisho vol. 17 176b5-6)、『無量寿經優婆塞舍願生偈註』は「迦旃隣陀者天竺柔軟草名也」とする (Taisho vol. 40 829b6-7)。また丹治 [1974] は、学名 Abrus precatorius (rosary pea, トウアズキ) という植物の「(豆の) さやのうぶ毛」とする (414頁 注237)。五島 [2011] 212頁 注105参照。
- (72) Tib: 'chags pa. いわゆる成劫のことを指していると思われる。『俱舍』: vivartakalpa, 'chags pa'i bskal pa, 成劫; vivartanyāṃ, chags pa'i tshe, 成時。
- (73) Tib: byang chub kyi (Ph: kis) yan lag gi (Ph: gis) rnam pas bskyed pa'i byams pa. Ch1: 佛道行無蔽匿之慈. Ch2: 覺慧慈。
- (74) Tib: mngon par 'du byed (KT insert pa med) pa'i mngon sum gyi rdzu 'phrul sems bskyed pa gcig gis. Ch1: 發意之頃. Ch2: 繫心在前以菩薩神力於一念頃。
- (75) Tib: 'jig rten gyi khams de pad ma'i dra bas g'yogs te brgal bar gyur to. Ch1: 令其世界滿布蓮華便即度去. Ch2: 作蓮華網遍覆火上從中過已. 注69参照。
- (76) Tib: bya lang gu (CP: 'gu) li. Ch1: 蠹蟲雀. Ch2: 小鳥. Tib から想定される Skt 形、gāṅgūlin は、「尾 (gāṅgūla) を持つもの」の意。尾が特徴的な鳥であろうか。Ch1は「虫を啄む雀」の意か。Ch1の記述では、雀と金翅鳥とを、「蠹蟲」〔を捕まえる量・速さ〕で比べたことになっている。
- (77) Ch2: 汝意云何。而是二鳥何者爲疾。
- (78) Ch1: 吾答曰。雀以蠹蟲，比金翅鳥鳳凰王。至於二者不可相方。金翅鳥王一舉無數。
- (79) Tib: chos 'dod. Ch1: 好妙法. Ch2: 欲法. Dharmakāma は『ラリタヴィスタラ』では、菩薩 (釈尊) の形容詞として (LV 55.1)、また、菩薩に共感する悪魔の息子の名として (LV 227.11) 出て来る。
- (80) Tib: kun byin. Ch1: 施信安. Ch2: 梵與. Skt の原語は確定し難いが、仮に Sarvadada としておく。Ch2の「梵與」の原語は Brahmadata と想定される。
- (81) Ch1: 即便恐怖. インド仏教の文脈では美しい音楽を耳にし女性の美しさを目にしたせいで通力を失ったと解すべきであろう。
- (82) 以下では、Ś のチベット表記は、写本・版本において sha'a ri'i bu (Skt. Śāriputra) と sha'a ra dwa ti'i bu (Skt. Śāradvatiputra) とが混在している。
- (83) Tib: rin chen srog shing. Ch1: 徳寶尊. Ch2: 寶大(文). Tib. srog shing は命の木の意。Mvy 7064では yaṣṭi (柱、竿、杖)、Mvy 5632, 7151では、akṣa (車軸) が対応する。Ratnayaṣṭi は、『維摩經』では菩薩の名 (VKN ch.1 sec.4) として、『ラリタヴィスタラ』では如來の名

(LV 213.3) として現れる。原語は確定しがたいが、仮に Ratnayaṣṭi としておく。第3巻において、マハーカーシャパの回想の中で、マンジュシュリーが他仏国土からこの娑婆世界に始めてやって来た頃のことを記されているが、その仏国土が、チベット語訳では、ことと同じ rin chen srog shing gi sangs rgyas kyi zhing となっている。漢訳は Ch1: 寶英如來佛国、Ch2: 寶王世界寶相佛所、であり、漢訳を見る限り、原語は異なるようであるが、もしチベット訳通りに、両者が同じ原語であったとすると、マンジュシュリーは、出身の仏国土にシャーリプトラを連れて行ったことになる。なお、Ch1と同じ訳者である『正法華經』第九品に見られる「寶英 (如來)」の Skt. 原語は Ratnaketurāja (Tib: rin po che'i me tog gi rgyal po) である。

- (84) Ch1: 或不具足者。  
 (85) Tib: 'byor cing rgyas pa'o. Ch1: 或以神足而立. Ch2: 或見豐樂.  
 (86) Tib: 'chags (PPh: chags) pa'o. 注72参照。  
 (87) Ch1, 2はこの部分を欠く。  
 (88) Ch1, 2はこの部分を欠く。  
 (89) Ch1, 2はこの部分を欠く。  
 (90) Tib: yang dag pa ma yin pa'o. Ch1: 悉如幻化. Ch2: 皆各不實.  
 (91) Cf. KP sec. 99: 「カーシュヤパよ、実に心は虚空に似ている。〔雨や雲・煙などの〕 外来の (偶然な) 汚れによって汚されるのです」 cittaṃ hi kāśyapa ākāśasadṛśam āgantuker (-kair) upakleśe(-śair) saṃkliṣyate.  
 (92) Tib: kun nas ldang ba med pa'i chos kyi sgo. Ch1: 無所受住法門. Ch2: 無有蓋纏法門.  
 (93) Ch2: 菩薩不達況復聲聞.  
 (94) Ch1: 八百.  
 (95) Ch1: 雖不得食, 以三昧三摩越而以自立. Ch2: 若入禪定七日不食.  
 (96) Ch1: 其未定意及正受者晝夜五日斷不得供, 身體羸劣而無氣力. Ch2: 餘凡夫人及諸學人五日絶食飢困羸瘦.  
 (97) Ch1, 2: 五日.  
 (98) Tib: khri dang khri'u. Cf. VKN ch. 4 sec. 3: 「そこにおいてたった一つの寢台をのぞいて、 [他の] 寢台や椅子や座具等も見えなくなった」 na tatra mañcā (Tib: khri) vā pīṭhā (Tib: khri'u) vā āsanāni (Tib: stan) vā saṃdṛśyante 'nyatraikasmān mañcat.  
 (99) Tib: dge slong gi dge 'dun rtas par byed par 'gyur ro. Ch1: 用比丘僧故. Ch2: 當充足比丘僧食.  
 (100) Ch1, 2はこの部分を欠く。  
 (101) Ch1: 吾將是事告文殊師利. 佛遣我來令仁立檀. Ch2はこの部分を欠く。  
 (102) Tib: gdugs tshod (P adds la) bab na. Ch1: 時至. Ch2: 若時至已.  
 (103) Tib: lus thams cad rnam par 'jig (KT: sgom) pa zhes bya ba'i ting nge 'dzin. Ch1: 有三昧名行入諸身定意正受. Ch2: 分別一切身三昧. 訳では KT の読みを採用した。  
 (104) Ch2はここに以下の一節を入れる。Ch2: 我作是念. 文殊師利將不令諸比丘失食時, 文殊師利化作己身, 爲諸釋梵護世說是分別一切身三昧. 文殊師利亦即入此分別一切身三昧已。  
 (105) Ch1はこの部分を欠く。  
 (106) Tib: bdag gis 'di mig gis (P adds 'di mig) mi rtsol (KT: mi mthong) bar bya'o. Ch2: 我今當蔽舍衛城中. Tibは直訳すれば「私によって彼が目では探られなく (見えなく) なるべきだ」となる。Skt. vicakṣus は AD によれば「目が見えない、困惑した」の意. vicakṣuḥkaraṇa は「目が見えなくする、困惑させる」の意になる。ここでは直訳通りで通じるが、後では、M 自身も視覚上の影響を受けているので、ここでは「困惑させる」とする方がいいであろう。Mey 6528: vicakṣuskaraṇāya, mig gis mi rtsol bar bya ba'i phyir. Cf. BHSD vicakṣu: perplexed, confused (in mind).



- (107) Tib: grong 'dab.  
 (108) Tib: yul mi.  
 (109) Tib: bden pa dang bden pa'i tshig. Ch1: 作誠信之願. Ch2: 作是志誠言. Cf. *BHSD* satyavacana: solemn statement of truth as a means of magic control of events.  
 (110) Tib: sgrogs par gyur cig. Ch1: 告. Ch2: 唱如是言.  
 (111) Tib: bden pa'i byin gyi rlabs byas so. Ch1: 發是願. Ch2: 立此誓已. Cf. *SP* 413.7-9: 「すべての仏陀・世尊たちを証人として、その御前において、真実の誓言 (\*satyādhiṣṭhāna) を立てます。＜如来を供養するために自ら私（一切衆生喜見菩薩摩訶薩）の腕を喜捨するならば、真実によって (satyena)、真実の言葉によって (satyavacanena)、私の身体は金色になるであろう。その同じ真実によって、真実のことばによって、私の腕はもとどおりになれ＞」 Cf. *BHSD* satyādhiṣṭhāna: truthful resolve.  
 (112) Tib: gang dge slong brgyad brgya po de dag dang, byang chub sems dpa' khri nyis stong po de dag la kha zas ji tsam gyis chog pa lung bzed des blangs par 'gyur ba de lta de ltar rang gi lung bzed de (byin gyis rlabs so). Ch1: 過踰足請千二百五十比丘萬二千菩薩、鉢中所變其如是也. Ch2: 八百比丘萬二千菩薩、所食之食在一鉢中、不見此鉢若減若滿。  
 (113) Ch2: 爲淨人。  
 (114) Tib: ri gshol mda' 'dzin. Ch1: 山名曰伊沙陀. Ch2: 伊沙陀山. Īṣādhāra は一般に「持軸山」と訳されるが、iṣā は軸 (akṣa) ではなく轅のことである。九山のうち、須弥山を囲む二つ目の山のこと。  
 (115) Ch2: 爲淨人。  
 (116) Tib: slob ma bzhin du. Ch1: 甚自厭苦舉鉢纔勝. Ch2: 盡力。  
 (117) 他化自在天 (Paranirmitavaśavartino Devāḥ) の主神。  
 (118) Tib: bran. Ch1: 侍者. Ch2: 使人。  
 (119) Ch1はこの一節を欠く。  
 (120) Ch2: 空無相無作。  
 (121) Tib: bden pa. Ch1: 誠實. Ch2: 正眞諦。  
 (122) Tib: nga'i zhe bya ba. Ch1: 我所非我所. Ch2: 我我所。  
 (123) Ch1: 不生不滅不起法忍. Ch2: 無生無滅無有諸行無生忍。  
 (124) チベット訳第2巻はここで終わるが、アーナンダの回想はさらに第3巻に入ってもしばらく続く。  
 (125) 主に参考にした資料は、【参考文献】に挙げた光川豊藝氏の文殊係經典に関する一連の論考と Lamotte [1960]、定方 [1989]、平川 [1995]、小澤 [1997]、Harrison [2000]、Williams [2009] (pp. 238-241)、梶山 [2012] である。本論文では概観しかできないので、詳細な検討・考察は別稿を期す。特に、『悲華經』における、文殊（アラネーミン Aranemin 王の第3王子であるインドラガナ Indragana）の誓願と仏による予言 (*Kṛp* 124.1-134.17) については上記の研究はいずれも言及していないので、それも視野に入れて考察したい。  
 (126) いわゆる「八相示現」もここに含められる。『首楞嚴三昧經』では首楞嚴三昧に入った菩薩（＝釈尊）の「八相示現」が、『十地經』では十地の菩薩による「八相示現」が記述されている。本經注51で指摘した文殊讚嘆の言葉 (VI-2) もこの「八相示現」と関係があるかも知れない。「高位の菩薩」については注128参照。  
 (127) 定方 [1989] 59-62頁。類似のエピソードは、『宝積經』「大神變會」に見られる。そこでは、文殊の前生である法幢比丘の教えによって善莊嚴王（＝今の商主天子）が出家を決意し、その千人の王子たち（後の賢劫千仏）も出家を希望するが、その中の一人である心大悲王子（＝今の釈尊）だけは、有情のために敢えて出家を断念して八戒・十善を實踐して王位に即いたとする（光川 [1985a] 165頁）。つまり、文殊は、釈尊を含む賢劫千仏の指導者（少なくともその立場にあった）ということになる。



- (129) 平川 [1995] の次の一節 (15頁) が参考になる。「〔文殊菩薩は〕八相成道を現じて衆生を済度し、入涅槃を現じて、三昧力によって分舍利を現じ、法滅尽を現ずるが、しかし首楞嚴三昧の功德力によって、畢竟じて涅槃に入らないのである。……〔経は〕『唯十地に住する菩薩のみ有りて、乃ち能く是の首楞嚴三昧を得るなり』と言っているから、文殊菩薩は首楞嚴三昧を得ているから、第十地の菩薩でなければならない」。同じ論文で平川博士は、「文殊を一生補処の菩薩と呼ぶことは諸大乘經典には見当たらない。文殊は十地の菩薩である」と主張する (2頁)。しかし、本経VI-1では、プラバーケートゥ如来が「マンジュシュリー法王子という名の一生補処の不退転の菩薩」と明言している (2 漢訳は「不退転菩薩」)。なお『十地経』では、対告者の金剛藏菩薩を筆頭に、会座に集まった菩薩はすべて「不退転の一生補処菩薩」とされている。「十地の菩薩」と「一生補処の不退転の菩薩」との関係を精査する必要があるだろう。Harrison [2000] は、一生補処・灌頂 (abhiṣeka) ・十地の観念は2世紀中頃に発展したであろうが、十地の体系が同じ頃にどの段階にまで発展していたかは不明であるとしている (p. 177)。なお、文殊と「首楞嚴三昧」(及び「八相示現」) の関係は聶道真訳『文殊師利般涅槃経』にも見られる。文殊像の観想を奨励する点に特徴がある。
- (130) たとえば、以下の文殊による維摩の人物評価は、本来は文殊に帰せられるものである。VKN ch. 4 sec. 1 「すべての菩薩・すべての仏陀の秘密の領域 (sthāna) に深く入り、すべてのマール (悪魔) の領域を覆すのに巧みな神通を自由に発揮し (mahābhijñāvikrīḍita)、不・不壊の法界の境界 (gocara) に最高の状態に到達し、一荘嚴の法界を無量の相の荘嚴として説法し、すべての衆生の機根に〔合わせて〕荘嚴を獲得させる知に巧みであり、巧みな方便に通達し、与えられた問いを決着する人です」
- (131) 後の時代の編入部分とされるいわゆる「提婆達多品」におけるサーガラ龍女の変成男子の段にも文殊が登場する。先に挙げた5要素では、2と4に相当するが、4については「空」の語は見られるものの、この段全体としては空の思想とは無縁である。また、「教誡者」というより、『法華経』の真正さを証言する役割を与えられた「法の決着 (dharmavinīścaya)」者である。文殊による女性の救済 (「変成男子」) を説いた經典に竺法護訳『諸仏要集経』がある。そこでは文殊が離意という女身菩薩に「そなたは女身より転じないのか」と問い、彼女が文殊に不可得・空の教えを説く。これは『維摩経』の天女とシャーリプトラとのやりとりを彷彿とさせるものである。また『須摩提菩薩経』(竺法護訳) でも文殊と女性 (妙慧童女) は同じような関係にあるが、ここでは、女性を「文殊のかつての師」としている。光川 [1991] を参照。
- (132) 以上見てきたことに関連して興味深いのは、『入法界品』である。この經典において、文殊は普賢とともに偉大な菩薩の最高位の位置にあり、如来の「獅子奮迅三昧」に入って、すぐれた神変を発揮するが、それは常に仏陀の威神力によるものとされる。『阿闍世王経』が強調した5の要素 (つまり諸仏の父母としての偉大性) は見られず、『首楞嚴三昧経』に見られた3の要素 (つまりすでに仏陀として涅槃に入ったにも関わらず「首楞嚴三昧」によって再生ししつつ人々に法を説くイメージ) は希薄になっている。むしろ普賢菩薩に菩薩の筆頭の地位を譲っているかに見える。「あらゆる現象に実体はなく、夢・幻のように空であり、空とは縁起であり、縁起とは仏の神変である」(梶山 [2012] 95頁) とするなら、文殊のみに与えられた特性はそれほど強調する必要はなくなったのかも知れない。
- (133) 1と2は文殊の人物像のいわば基本要素であるが、本経ではたとえば、シャーリプトラの述懐に、「このマンジュシュリー法王子は、以前、何十万もの多くの仏陀たちの前で、法を語り、偉大な声聞たちを沈黙させたのを、私は目撃しました」とあり (VI-1)、また、4に関しては、特に、第4巻で示される外道である勝志 (\*Jayamati) の教誡の例などを挙げることができる。
- (134) 光川 [1985a] によれば、三種の神変 (説法・教誡・神通) が仏陀が衆生を教化するための三つの手だてとされる。この「三種神変」は『阿含経』に由来し、『俱舍論』で考究されるが、『宝積経』『大神变会』では、説法神変=如来による予言、教誡神変=悟りへの道を進むについての教誡、神通神変=有情の驕慢を調伏するための神通 (たとえば一身と多身の自由な示現)

とする。また「教誡」が神変とされるのは、不可説の空性を敢えて説くからだとされる。この分類によれば、文殊には教誡神変と神通神変があることになる。本経VI-6には「具寿シャーリプトラよ、マンジュシュリー法王子の神通の自由な発揮 (\**ṛddhivikurvita*) と法の教示の自由な発揮 (\**dharmadeśanāvikurvita*) の中で、私がわずかながら目の当たりにしたものは、このようなものです」とあり、ここでの菩薩による「法の教示 (説法)」は三種神変の分類では「教誡」に当たることが分かる。

なお、大乘經典における神通・神変の意味については梶山 [2012] が詳しい。とりわけ注目すべきは「衆生の側にいかなる要求もしないで、釈迦仏の放光に遇う衆生を無上正等覺に至ることを決定させ、悪趣の衆生を善趣に生まれ変わらせ、心身障害者や病者を癒し、悪人を善人に変えるという、いわば他力の救済を約束する」とし、他力の教えがすでに『般若經』にあらわれていることに注意を喚起している点である (92-93頁)。

- (134) 文殊の神変については、光川 [1997] が詳しい。本経の神変についても詳しい考察が加えられている (56-68頁)。
- (135) *SP* 388.8-9.
- (136) 本経には「風 (災)」と「住 (劫)」は言及されていない。なお、梶山 [2012] によれば (50-51頁)、大乘の「終末論」では、劫末において、地獄の住人も含めてすべての有情が上界に転生し、最終的にはすべて救済される、と考えるが、この劫末時の「三災」を仏の三昧の力 (神通力) と放光に代え、その光明に触れる有情たちはすべて無上正等覺を得ることに決定するという思想を発展させたとする。大乘は、劫末時のすべての有情の例外のない救済を、仏陀の神変による通常時の救済に発展させたが、それが『無量寿經』を始めとする浄土の教え、他力救済の思想の先蹤となったのである。
- (137) さらにVI-6では、シャーリプトラに見える仏国土の多様なありようは、文殊にとっては、すべて空っぽの空間のようなものである、として、「客塵煩惱・心性本淨」の教えを説く。『文殊師利遊戯大乘經』(竺法護訳『大淨法門經』) では、文殊はある娼婦に対して「汝こそ菩提」と言い、煩惱の自性が菩提であることを教えているが、その理由に「客塵煩惱・心性本淨」を挙げている。光川 [1995] 参照。文殊による「心性本淨」の説法は『阿闍世王經』『心本淨品』にも見られる。なお、このVI-6では「心性本淨」に関連して、<本性清淨 (\**prakṛtipariśuddha*) な法界 (\**dharmadhātu*) に入れば、纏・縛 [などの煩惱] が形成力 (\**saṃskāra*) によって発動することがなくなる。これを「[潜勢的な煩惱が] 発動しない法の門 (\**aparyavasthānadharmadvāra*)」という。この門に依れば、一切諸法の本性清淨に悟入し煩惱によって覆われることはない>としている点は注目に値しよう。
- (138) 文殊と悪魔、文殊による破魔については、光川 [2000] が竺法護訳『魔逆經』を中心に、計7経 (本経もその中の一つに挙げられている) を資料として考察している。

(ごしま きよたか 非常勤講師)

2013年11月15日受理